

祝祭日講話  
全

4

1691

014120-000-6

4-169

祝祭日講話

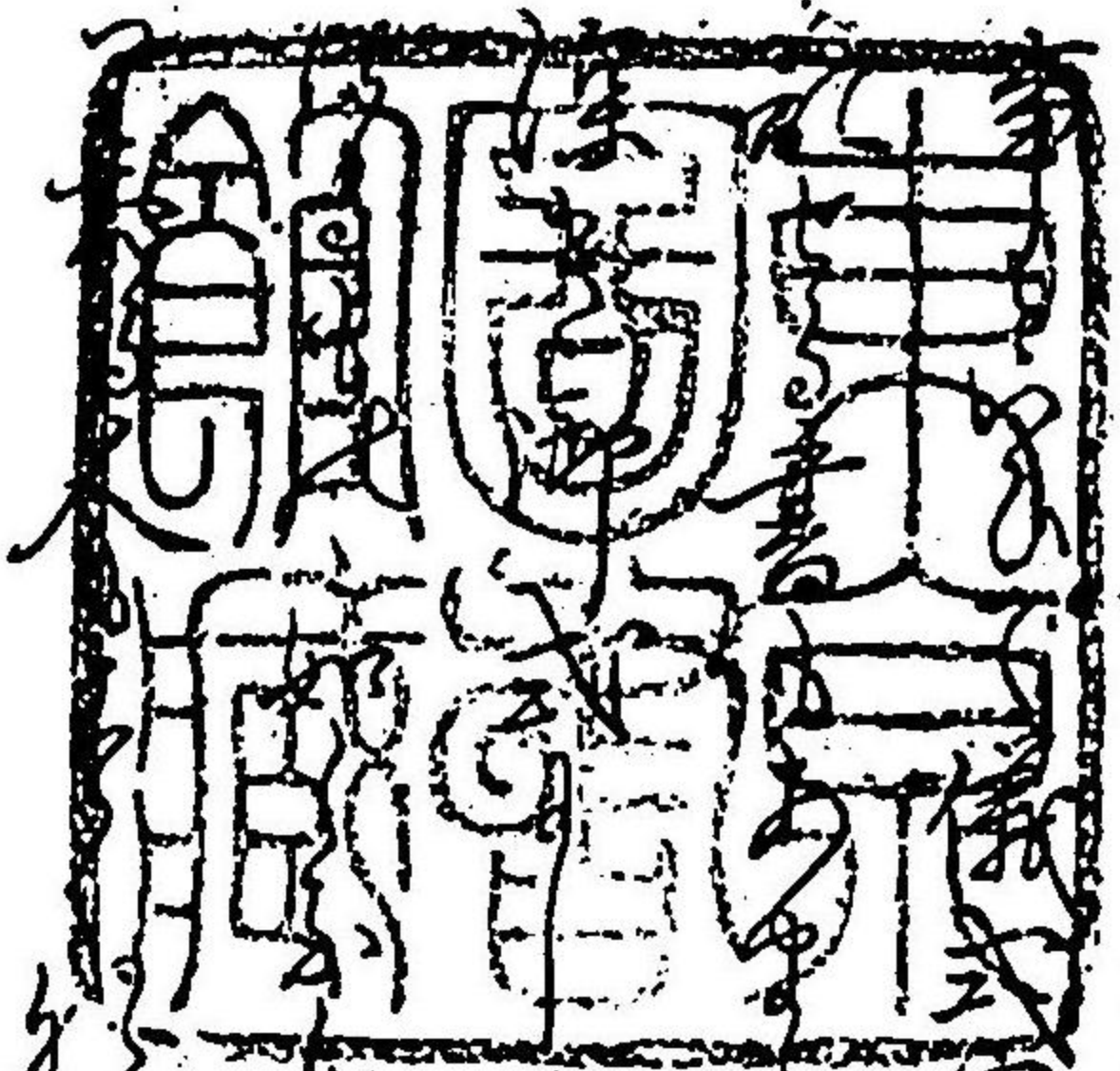
細川 潤次郎 / 著

M26

ABB-0393



4 特35  
169 822



昔の大津代に朝廷はな事節會といひ年中行  
儀式高會の日々多くす其の故を  
た人のとまそそあつ  
られぬあつていふ  
中  
下はぬおあつ  
けん思はるあれ  
はませまの國人あつて行れ来り  
五節句といふ



といひて—のちのち國をこゝろに置く  
 —のちの日の—のちのちの明治の年乃大佛代  
 うつて大陰層—のちのちの今の大佛代  
 日と大の下の人—のちのちの今の大佛代  
 なる—のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 せし—のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 御—のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代

大は—のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代  
 —のちのちの今の大佛代

女子高等師範学校の講師の末より  
 本居豊顕

三ノ五ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ四十一ノ四十二ノ四十三ノ四十四ノ四十五ノ四十六ノ四十七ノ四十八ノ四十九ノ五十ノ五十一ノ五十二ノ五十三ノ五十四ノ五十五ノ五十六ノ五十七ノ五十八ノ五十九ノ六十ノ六十一ノ六十二ノ六十三ノ六十四ノ六十五ノ六十六ノ六十七ノ六十八ノ六十九ノ七十ノ七十一ノ七十二ノ七十三ノ七十四ノ七十五ノ七十六ノ七十七ノ七十八ノ七十九ノ八十ノ八十一ノ八十二ノ八十三ノ八十四ノ八十五ノ八十六ノ八十七ノ八十八ノ八十九ノ九十ノ九十一ノ九十二ノ九十三ノ九十四ノ九十五ノ九十六ノ九十七ノ九十八ノ九十九ノ百ノ百一ノ百二ノ百三ノ百四ノ百五ノ百六ノ百七ノ百八ノ百九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百十

### 祝祭日講話

#### 緒言

明治廿四年六月十七日 文部省ハ省令第四號ヲ以テ小學校祝日大祭日儀式規程ヲ定メラレタリ其第一條ノ第三項ニ曰ク學校長若クハ教員恭ク教育ニ關スル勅語ニ基キ 聖意ノ在ル所ヲ誨告シ又ハ歷代 天皇ノ盛德鴻業ヲ叙シ若クハ祝日大祭日ノ由來ヲ叙スル等其祝日大祭日ニ相應スル演説ヲ爲シ忠君愛國ノ志氣ヲ涵養セン事ヲ務ムトアリ 潤次郎客歲八月女子高等師範學校長ノ職ヲ奉シテヨリ以來右ノ儀式規程第一條第三項ノ旨趣ニ基キ祝日大祭日毎ニ相應ノ講話ヲ爲シタリキ蓋本校ハ小學校ニハ非サルモ學校ニハ相違ナキノミナラス小學校ヲモ包含セルコトナ

レハ此規程ニ遵フハ當然ノコトナル可ケレハナリ余ハ夙ニ朝班ニ厠ハリ謬テ寵榮ヲ荷ヒ祝日大祭日ニ方テ親ク盛典ヲ拜觀スルコトヲ得タリ且儀制ノ節目ニ至テハ關係アル官人ノ説ヲ聞クコトヲ得タリ耳聞目見深ク感スル所アリ是ニ於テ傳記ヲ援引シ愚衷ヲ吐露シテ以テ講話ノ勞ヲ執レリ今一周年間ノ講話ノ要領ヲ輯メテ此冊子ト爲ス此類ノ書世ニ行ハル、者固リ少トセス讀ム者庶幾クハ併セ考フル所アラシクコトヲ

明治廿五年六月

女子高等師範學校長

細川潤次郎拜識

### 祝祭日講話

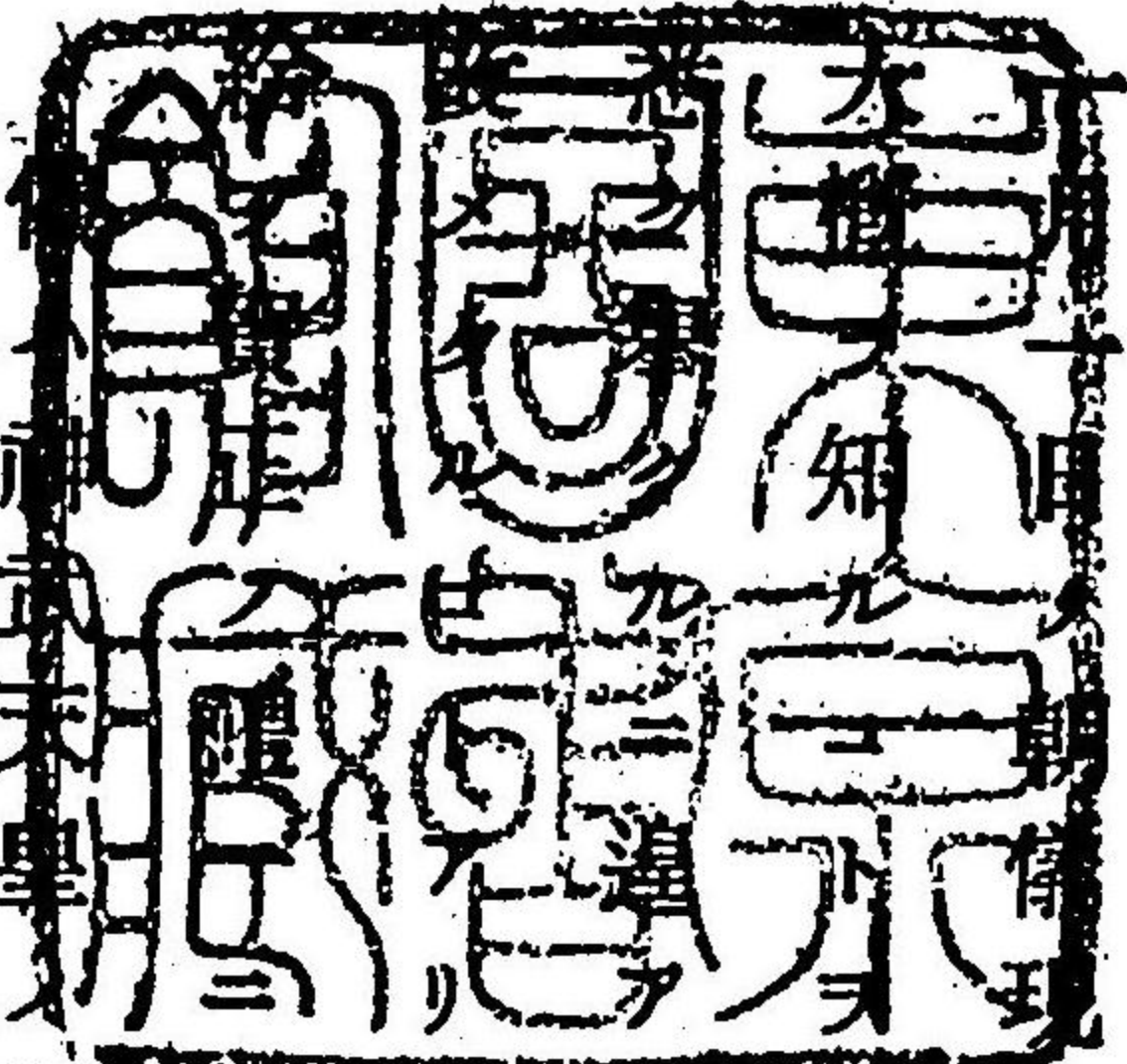
#### 目錄

- 一 一月一日講話
- 一 元始祭日講話
- 一 孝明天皇祭日講話
- 一 紀元節日講話
- 一 神武天皇祭日講話
- 一 皇靈祭日講話
- 一 神嘗祭日講話
- 一 天長節日講話
- 一 新嘗祭日講話

#### 附錄

一皇后宮御誕辰講話

一月一日講話



行ノ次第ハ官報ノ掲載スル所ヲ見テ其  
得可シ其沿革ニ至テハ世々異同アリテ  
ラス明治中興ノ後ニ至テモ時ニ其儀ヲ  
下雖モ賀正ノ禮ハ古今ニ通シテ行ハセ  
朝賀ト稱シ又朝拜ト曰フ抑此賀正朝拜  
御即位ト與ニ行ハレタル時ニ始リ孝德  
天皇以來天皇皇后大極殿ニ御シ群臣ノ拜賀ヲ受ケサセ給  
フ其儀御即位ニ同シ又奏賀奏瑞ノ儀アリ此儀嵯峨天皇ノ  
時ニ至テ大ニ備ハレリト云フ延喜天曆ノ頃ニ至リ此ノ朝  
賀ノ禮ヲ行ハサルトキハ猶 朝拜ノ儀ヲ行ヒテ群臣ハ天  
皇ヲ清涼殿ニ拜シ奉リシユトアリ近日ニ至テハ封建ノ勢

變シ中外ノ交通開クルニ從ヒ前日ノ典禮トハ大ニ異ナリ  
テ群臣ノミナラス外國ノ使臣ヲモ延見シ給フコトナレ  
リ古禮ニハ又元日ノ節會ト曰フコトアリテ天皇豐樂殿ニ  
於テ百官ニ酒ヲ賜フコトアリ後世此儀ヲ紫宸殿ニ於テ行  
フコトアリ且外任ノ奏諸司ノ奏ト曰フコトアリ諸司ノ奏  
トハ七曜ノ御曆日月五星ヲ注シタル御曆冰様去年ノ氷ヲ納メタル所ノ様ヲ宮  
内省ヨリ奉リ氷ノ厚薄ヲ以テ年  
ノ豐凶ヲ占ハル腹赤魚ノ鱗ノ奏等ヲ謂フ此等ノ事ハ今日行ヒ  
給ハスト雖モ今日行ハルル所ノ新年宴會ハ即元日ノ節會  
ノ遺風ナル可ク又四日ノ政始ハ即奏賀奏瑞外任奏諸司奏  
等ノ遺風ナル可クシテ一日ノ禮典ヲ各別ノ日ニ於テ行ハ  
セ給フ者ト謂フ可シ  
此ノ日賀正ノ儀ヲ行ハセ給フノ前四方拜ノ儀アリ是亦古

昔ヨリノ御儀式ニシテ午前四時ニ天皇四方ヲ拜シ年災ヲ  
禳ヒ寶祚ヲ祈リ給フ之ヲ總稱シテ四方拜ト曰フ四方拜ハ  
四方ヲ拜スルノ義ニ取ルト雖モ單ニ四方ヲ拜シ給フニハ  
非ス伊勢神宮ヲ始メ奉リ天神地祇四方ノ諸神社及山陵ヲ  
拜シ給フ更ニ之ヲ詳ニスルトキハ先西方ニテハ皇大神宮  
ヲ拜シ次ニ天神地祇ヲ拜シ又神武天皇ノ御陵及孝明天皇  
ノ御陵ヲ拜シ其他四方ノ神社ヲ拜シ給ヒ畢リテ賢所皇靈  
殿及神殿ヲ拜シ給フ此四方拜ノ儀ハ延喜以來定式トナレ  
リト雖モ明治ノ初ヨリハ古禮ヲ斟酌シテ上文ノ如ク定メ  
ラル

此ノ四方拜ハ蓋寛平年中ニ始マル宇多天皇御記ニ仁和五  
年正月元日寅ノ刻天地四方山陵ヲ拜シ給ヒシコトアリ又

宇多天皇實錄ニ寛平二年正月朔旦四方拜如例トアルハ寛平元年ヨリ二年頃四方拜ヲ行ヒ給ヘル明證ナリ衆說蓋此ニ本ツケルナラシ然レトモ正月元日ヨリ外ノ日ニモ臨時ニ四方拜ノ儀ヲ行ヒタルコトハ遠ク其前ニ在リ日本書紀ニ皇極天皇元年八月朔天皇幸南淵河上跪拜四方祈雨云々トアリ異本弘安禮節ニ大和比咩世紀ヲ引テ垂仁天皇十一年壬寅正月朔日主上四方ノ春光ヲ拜ストアルヲ四方拜ノ起原ト曰フ然レトモ四方ノ春光ト曰フテ四方ノ神社トハ日ハス正月元日ニ四方ノ御拜アリシコトハ勿論ナル可ケレトモ天地四方ノ神社山陵ヲ拜スルコトニハ非サル可シ大和比咩世紀ハ疑信相半ハスルノ書ニシテ此書ニ載セタル所ヲ以テ確證トハ認メ難シ四季物語ニハ崇神天皇ノ三

年ニ始マルト曰フ按スルニ崇神天皇六年ノ御紀ニ曰ク先是天照大神倭大國魂二神竝祭於天皇大殿之内然畏其神勢共住不安故以天照大神託豐鍬入姬命祭於倭笠縫邑仍立磯城神籬亦以日本大國魂神託淳名城入姬命祭トアリ遙拜ノ事ハ此頃ニ起レルコト勿論ナル可ケレトモ崇神天皇ノ三年ニハ未タ此等ノ事タニアラサルヲ以テ此說モ亦信シ難シトス

此ノ禮ヲ行フニ於テ天地山陵ヲ拜スルコトナレトモ古例ニハ屬星ヲ拜スルコトアリ今江家次第ノ要ヲ撮シテ參考ニ供セントス追儼後主殿寮供御湯雞鳴掃部寮奉仕御裝束於清涼殿東庭先敷葉薦其上敷長筵其上立御屏風八帖設御座三所一所拜屬星座座前机燒香置華燃燈一所拜天地之座



一所拜陵座寅一刻出御入御之間獻御笏閉御屏風次皇上於拜屬星座端笏北向稱御屬星名字

子年貪狼星字司命  
神子

丑亥年巨門星字貞  
文子

寅戌年祿存星字祿  
會子

卯酉年文曲星字機  
靈子

辰申年廉貞星字衛不  
機子

己未年武曲星字亥大  
靈子

午年破軍星字持大  
靈子

次再拜咒曰

賊寇之中

過度我身

毒魔之中

過度我身

毒氣之中

過度我身

危厄之中

過度我身

五鬼六害之中

過度我身

五兵口舌之中

過度我身

厭魅咒咀之中

過度我身

萬病除愈所欲隨心

急々如律令

次於拜天地座北向再拜天次西北向再拜地次東向再拜南向再拜西向再拜北向再拜次於南座向山陵事畢開御屏風還御所司撤御座等云々

此ノ屬星ヲ拜スルコトハ恐クハ陰陽家ノ説ニ依レル者ナラシ陰陽家ノ言盛ニ行ハレタル時ニ方テハ年首ニ屬星ヲ拜スルコト上下殆ト一般ノ風トナレリ江家次第ニ載スル所ヲ見レハ皆ニ上御一人ニ限ラス庶人ノ儀サヘ掲ケタレハ群臣百僚ハ言フニ及ハス此ノ禮ヲ行ヒシコト明ナリ其文ニ曰ク

庶人儀卯時前庭敷座云々

北向拜屬星向乾拜天向坤拜地

次四方次大將軍天一太白以上再拜次氏神竈神可加先  
聖先師墳墓又說曰先聖先師不可用文學志人可拜之  
近世ニ至テハ四方拜ハ上御一人行ハセ給フ所トナリ其四  
方拜ニ於テモ屬星ヲ拜スルコトハ行ヒ給ハス士庶人ノ間  
復此風アルコトナシ然レトモ後世ノ人歳首ニ歳德神ヲ拜  
シ又兄方參ナトト唱フル社參ヲナスカ如キハ皆中古屬星  
ヲ拜スルノ類ニシテ陰陽家ノ説ノ多少存留セル者ナル可  
シ蓋歳首ノ日ニ於テ其年ノ屬星若クハ十干ノ在ル所ニ向  
フテ一年ノ幸福ヲ祈ルハ其謂レナキニ非ス  
中古此日御藥ヲ供スルノ儀ヲ行ハセラル其コト弘仁年中  
ニ始マルト曰フ其儀ノ大略ハ前年ノ十二月十九日屠蘇ヲ  
御井ニ漬シ置クコトアリ元日早旦ニ其準備ヲナシ平旦ニ

天皇東廂ニ御シ陪膳女房以下着座シ御臺ヲ供シ御酒ヲ煖  
メ御藥ヲ酒ニ入レテ之ヲ奉ル此ノ御藥ハ即屠蘇散ナリ宮  
内輔典藥頭侍醫及藥女官等モ皆之ヲ嘗ム此ヲ第一獻トス  
再ヒ神明白散ヲ供ス此ヲ第二獻トス又度嶂散ヲ供ス此ヲ  
第三獻トス其次ニ典藥寮御膏藥ヲ供ス膏藥ハ干瘡膏ナリ  
天皇之ヲ取テ右手ノ無名指ヲ以テ左ノ掌ニ塗ラシメ給フ  
此等ノ儀ハ漢土ノ風ヲ傳ヘタル者ニシテ音ニ朝廷ノミナ  
ラス幕府諸侯以下士庶人ニ至ルマテ元日ニ屠蘇酒ヲ飲ム  
コトハ今日ニ至ルマテモ尙上下ニ行ハレタリ  
夫一月一日賀正ノ儀ハ音ニ我邦ノミナラス蓋萬國ノ共ニ  
同フスル所ナリ然レトモ賀正ノ儀ヲ行フノ外ニ四方拜ノ  
如キ祭儀ヲ舉行スルコトハ固リ聞カサル所ニシテ漢土ノ

如キモ亦此ノ日ヲ以テ群臣ノ朝賀ヲ受クルノ外別ニ祭典  
アルコトヲ聞カス我朝家ノ儀禮ハ古例ニ依リ漢土ノ制ヲ  
モ參酌シタル者ナレトモ此ノ四方拜ノ如キハ大抵古例ニ  
依レル者ナルコト知ル可シ我カ帝國ノ臣民タル者ハ此日  
ニ當テ尊長ヲ祝シ親戚朋友ヲ賀スルノ外氏神若クハ其他  
ノ神社及其先靈ヲ拜スルカ如キコトアラハ能ク古例ニ合  
ヒテ皇室敬神ノ意ヲ奉體スル者ト謂フ可シ

### 元始祭日講話

毎年一月三日我天皇陛下ハ賢所皇靈殿神殿ノ三所ニ於テ  
御親祭ノ儀ヲ行ハセ給フ此ノ三所ハ皇位ノ元始若クハ元  
始ニ關係アル者ナルヲ以テ報本反始ノ義ニ基キ此ノ御祭  
典ヲ設ケラル實ニ明治五年正月三日ノコトナリキ聞ク所

ニ據レハ元始ノ字ハ古事記ノ序文中元始綿邈ウキ賴先聖而察  
生神立人之世トアルニ由リ取テ以テ御祭典ノ御名ト定メ  
ラレタリト此ノ如クナレハ此ノ御祭典ハ明治五年ニ始マ  
レル者ノ如シト雖モ其前明治三年神祇官御再興在セラレ  
八神天神地祇及ヒ歷朝ノ皇靈ヲ御鎮祭アリテ歳首ニ皇位  
ノ元始ヲ祝ヒ奉ルノ祭典ヲ行ヒ給ヒ其例ニ依リ翌四年正  
月三日神祇省ニ行幸マシマシテ御親祭アラセラレタリ五  
年ノ正月三日ヨリハ此ノ名稱定マリテ年々ノ御例トナリ  
且其式ヲ頒布シテ全國ノ官幣社國幣社ヨリ府縣鄉村社ニ  
至ルマテ皆此祭ヲ行ハシム此時賢所及ヒ皇靈殿ハ宮中ニ  
在リシヲ以テ天皇陛下ニハ先ツ宮中ノ御親祭ヲ行ヒ給ヒ  
次ニ神祇省ニ行幸マシマシテ八神天神地祇ヲ祭り給フ同

年四月八神天神地祇ハ宮中へ御遷座アリ次テ同年十一月  
八神天神地祇ノ兩座ヲ合セテ單ニ神殿ト稱シ奉ル翌六年  
一月三日宮中ニ於テ賢所皇靈殿神殿ノ三所ヲ祭ル此ヲ現  
行御儀式ノ由テ始マル所トス爾來皇居炎上ニ由テ赤坂  
ヲ假ノ皇居トシ給ヘルヲ以テ年々ノ御祭典ヲ赤坂ノ假皇  
居ニ行ヒ給ヒシカ二十二年新宮へ御遷幸マシマシヨリ  
ハ今ノ宮城ニ於テ行ハルルコトト成リ又以上ハ此ノ御祭  
典ノ起原及ヒ沿革ナリ  
元始祭ハ上ニ言フカ如ク近例ナリト雖モ奉祭スル所ノ事  
實ニ至テハ開國以來繼續セル御祭典ニシテ唯皇靈奉祭ノ  
御儀式ニ至テハ多少ノ變遷アルノミナリ今茲ニ三所ノ御  
由來ヲ略叙スレハ賢所ハ即天照大神ノ神殿ニシテ其字ハ

種々ノ字ヲ用フ扶桑略記ノ威所御堂關白記ノ尊所小右記  
ノ恐所中右記ノ畏所等字ハ異ナレトモ共ニカシコトコロ  
ト訓シテ尊崇シ奉ル可キ所ノ義タルニ外ナラス又禁秘御  
抄ニ曰ヘル内侍所ノ如キモ亦此賢所ニシテ内侍官ノ奉仕  
セル所ナルヲ以テナリ其御神體ハ即御鏡ニシテ其御鏡ハ  
天照大神ノ天忍穗耳尊ニ授ケ給ヒシ所ノモノナリ日本書  
紀ニ曰ク天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊祝之曰吾兒視此  
寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡又古事記ニ曰ク於是  
副賜其遠岐斯八尺勾璣鏡及章那藝劍而詔者此之鏡者專爲  
我御魂而如拜吾前伊都伎奉トアルカ如キハ即此御鏡ノコ  
トナリ崇神天皇六年ノ紀ニ曰ク先是天照大神倭太國魂二  
神並祭於天皇大殿之内然畏其神勢共住不安故以天照大神

託豐楸入姬命祭於倭笠縫邑仍立磯城神籬云々此ヨリ後處  
々ニ御遷リマシテ遂ニ伊勢ニ鎮リ座ス此ノ時新ニ御鏡ヲ作  
リ給ヒテ温明殿ニ鎮座在サセ給ヒ來リシヲ明治二年御遷  
都ニ由テ舊假皇居ニ遷座シ給ヒ四年詔シテ新ニ神殿ヲ作  
リ神器ト皇靈トヲ官中ニ安シ奉ル六年皇居炎上ニ由リ赤  
坂假皇居ニ遷座アリ二十二年新官御遷幸以來今ノ官城中  
ニ遷シ奉ル皇靈殿ハ即神武天皇ヲ始メ奉リ御歷代ノ皇靈  
並ニ后妃皇親ノ御靈ヲ鎮齋シ給ヘル所ナリ神武天皇以前  
ノ天皇ハ特ニ官祭アルヲ以テ皇靈ニ列シ給ハス抑皇靈ヲ  
祭ルコトハ上古ヨリノコトナル可ク中古以後ハ朝廷ニモ  
佛式ヲ御用ヒナサレタレハ追遠ノ意ハ佛式ニ寓セシコト  
ナルヘシ明治四年ニ至リ神器ト共ニ官中ニ奉安セシヨリ

以來其儀漸ク備ハリ十一年春秋二季祭ヲ設ケラレテ現行  
ノ例トナレリ又神殿ハ八神及ヒ天神地祇八百萬神ヲ鎮齋  
シ給ヘル所ニシテ八神トハ神産日神高御産日神玉積産日  
神生産日神足産日神大官賣神御食津神事代主神以上ノ八  
座ヲ云フ日本書紀ニ曰ク高皇産靈尊因勅曰吾則起樹天津  
神籬天津磐境當爲吾孫奉齋矣汝天兒屋命太玉命宜持天津  
神籬降於葦原中國亦爲吾孫奉齋焉ト此ノ神籬ハ即八座ノ  
神位ニシテ磐境ハ神位ヲ奉安スル處ナリト云フ中臣齋部  
ノ兩氏其祭法ヲ傳ヘ大臣之ヲ掌リ神祇官ヲ設ケ以テ諸官  
廳ノ上ニ置ケリ明治中興ノ初ニモ亦神祇官ヲ置カレタリ  
ト雖モ何モナク廢セラレタルヲ以テ八神及ヒ地祇八百萬  
神ヲ官中ニ遷シ奉リ假リニ賢所ニ奉安セリ此レ五年三月十

八日ノ布告ニ基ケル者ニシテ其宮中ニ遷座シ給ヘルハ全年四月ノコトナリキ全年十一月二十七日是迄宮中八神殿ニ於テ天神地祇及八神兩座ニ御祭被爲在候處自今天神地祇八神御合併八神殿ノ稱ヲ廢シ更ニ神殿ト可稱旨御布告アリ抑神殿ト皇靈殿トハ賢所ノ左右即東西殿ニ在ル可キコトハ勿論ナレトモ先後ノ序ヲ以テ言フトキハ賢所神殿皇靈殿ト稱シ奉ル可キモノ、如クナレトモ皇靈殿ハ神殿ヨリモ先ニ西殿ニ御遷座アリシ故神殿ハ其次ニ東殿ニ御遷座アリテ賢所皇靈殿神殿ト稱シ奉ルコトトナレルハ已ムヲ得サセヲレサル御次第ナル可シ

元始祭ノ御次第ハ官報ニモ掲載セルカ更ニ之ヲ詳ニセハ當日午前九時御殿ノ御裝束アリ大眞賢木ヲ御門ノ左右ニ

建ルコト常ノ如シ次ニ宮内省ノ官員著床次ニ三殿ノ開扉ヲナシ奉ル其間音樂ヲ奏ス次ニ神饌及ヒ御幣物ヲ供ヘ奉ル此間モ音樂ヲ奏ス畢リテ御内陣ニ御座ヲ設ケ奉ル十時天皇出御在セ給フ親王内大臣宮内大臣各大臣以下近衛士官等供奉ス侍從ハ齋服武官ハ正裝自余ノ官員ハ皆大禮服ヲ着ス天皇陛下ニハ先賢所ノ便殿ニ臨御御束帶ヲ着セラレ御手水畢リテ賢所ニ進マセ給フ掌典長ハ御先導ヲナシ侍從ハ御裾又ハ御劔御笏ヲ捧ケテ隨從シ奉ル此ヨリ御幌ノ中ニ入ラセ給ヒテ御玉串ヲ奉リ御拜アリテ御告文ヲ奏セサセ給フヤニ承リ又御鈴ノ儀アリ儀畢リテ皇靈殿ニ進マセ給ヒ其儀賢所ニ於ケルカ如クニシテ御鈴ノ儀ナシ又神殿ニ進マセ給フ其儀皇靈殿ニ於ケルカ如シ畢リテ入

御在サセ給フ是ニ於テ親王大員其他親任勅任ノ官員并ニ  
宮内省ノ官員拜禮ス畢リテ神饌及ヒ御幣物ヲ撤ス此間音  
樂ヲ奏ス次ニ三殿共ニ閉扉シ奉ル此間モ亦音樂ヲ奏ス御  
祭典ハ是ニテ畢リ十一時ニ至リ更ニ三殿ノ開扉ヲナシ奉  
ル皇太后宮皇后宮東宮ノ御拜在セラル正午ヨリ午後二時  
マテ有爵者ヨリ以下判任準判任ニ至ルマテノ人々ノ參拜  
アリテ其儀全ク終ル者トス御祭典ノ御次第圖此處ニノミ之ヲ詳ニシテ  
其他ハ略ス益大體ハ官報ニ掲載セルカ如ク  
且元始祭ト略相俟  
タルヲ以テナリ

### 孝明天皇祭日講話

此御祭日ノ緣起ハ至テ明白ナルコトナリ蓋親死シテ之ヲ祭  
ルハ一般ノ人情ニシテ上下通行ノ禮ナリ我皇室ハ格別ナ  
ルコトナカラ固リ一般ノ人情ノ範圍外ニ在ル可キ筈モナ

ケレハ我天皇陛下ノ御父君ニテマシマセル孝明天皇ニ對  
シ給ヒ罔極ノ御恩ニ酬ヒンカ爲メ嚴肅ナル禮儀ヲ用ヒテ  
年々御親祭ノ典ヲ行ヒ給フコトナレハ今更説明スルノ要  
ナカル可シ

皇靈祭ヲ春秋二季ニ行ハセラル、ニ由リ無論孝明天皇ノ  
御靈モ其中ニ包含セリト雖モ特ニ此御祭典ヲ行ハセラル  
ル所以ノ者ハ恰モ我々が年々先祖祭ヲ執行シナカラ別ニ  
年忌祭ヲ行フニ異ナラス

今日ハ賢所ニ於テ御親祭ヲ行ハル其次第官報ニ載スル所  
ノ如シ又數日前ヨリ京都後月輪ノ山陵ニ勅使ヲ發遣セラ  
ル此事モ官報ニ出タリ

此ノ如キ次第ナルヲ以テ此御祭日ハ他ノ御祭日ト異ナル

所アリテ臣民タルモノハ宜ク靜肅ニシテ國忌ノ例ニ依ル  
可キ者ナリトス

孝明天皇御諱ハ統仁ト申シ奉ル仁孝天皇ノ第四ノ皇子ナ  
リ御母ハ新待賢門院藤原氏雅子ト稱ス即贈左大臣正親町  
實光ノ御女ナリ天保二年六月十四日御降誕熙官ト稱シ奉  
ル全六年六月二十一日准后藤原祺子ノ御養子トナラセ給  
フ全九月十八日親王ニ立セ給ヒ全十一年三月十四日皇太  
子ニ立セ給ヒ全十五年二月二十七日御元服弘化三年仁孝  
天皇崩御在ラセラル、ニ由リ二月十三日御踐祚在サセ給  
フ御年ハ十六ナリキ全四年九月二十三日御即位ノ禮ヲ行  
ハセラレ明年元ヲ嘉永ト改ム是歲十二月十五日女御入内  
アリ女御ハ從三位藤原夙子ト稱シ奉ル左大臣九條尙忠ノ

女ナリ在位二十一年御即位ノ年ヨリ算フレハ二十年故ニ  
御在位二十年ト曰フ者アリ

慶應二年十二月崩御御年三十七(或ハ三十六ト曰フ誤ナル  
ヘシ)全三年正月二十五日泉涌寺後山ニ葬メ奉リ後月輪東  
山陵ト稱シ奉ル今茲明治二十五年マテ御在世マシマスト  
スルモ御年六十二歳ニマシマシテ左マテノ御高齢ト申シ  
奉ル可キニ非ス況ヤ御年僅ニ三十七歳ニシテ此世ヲ捐テ  
給ヒシハ臣子タル者ノ痛惜ニ堪ヘサル次第ナリ

天皇御性質剛健英明ニマシマシテ御在位中ハ御少壯ノ御時  
ナレハ殊ニ勵精シテ治ヲ圖リ皇運ノ衰頽ヲ歎カセ給ヒ武  
臣ノ驕横ヲ憂ヒ給フ御志日ニ篤ク御憤年ニ深クマシマシ  
ニ嘉永年中ヨリ亞美理加合衆國ヲ始トシテ蕃國ノ軍艦陸



續トシテ渡來シ和親貿易ヲ強請ス時ニ久シク太平ニ狃レ上下偷安ノ際突然意外ノ事ニ遭遇シ海内ノ人心之カ爲ニ洶々然タリ幕府狼狽シテ之ニ應接シ遂ニ其請ヲ許ス幕府ノ措置已ニ人心ニ慊ラス當時ノ人又外國ノ事情ニ憤ク尊王愛國ノ正議ヲ唱フル者モアレトモ攘夷鎖港ノ暴論ヲナス者モ亦之アリ議論紛紜底止スル所ヲ知ラス天皇此事ヲ聞キ給フヨリ益宸襟ヲ惱マサレ學習院ヲ開テ諸侯ノ建言ヲ求メ八幡加茂ノ社ニ行幸シテ御祈念在サセラレタリ其尤恐入り奉リタルコトハ禁中ノ庭上荒薦ヲ敷キ斷食シ給ヒテ身ヲ以テ國難ニ當ランコトヲ禱リ給ヘルコト一七日内大臣三條實萬其玉體ニ御障アラントヲ恐レ諫レトモ聽キ入レ給ハサリキ此ノ如キ宵衣旰食ノ御苦勞在ラセラ

ルト雖モ當時ノ皇室ハ名分上ハ皇室ナレトモ御實力トテハ在ラサセラレヌコト故大藩ノ力ニ頼ラサルコトヲ得ス大藩中ニハ勤王無二ノ家柄モ少カラサレトモ許多ノ藩ニハ俗論行ハレテ正議伸ヒス天皇ノ御志ノ程モ容易ニ四海ノ人心ニ洽キコトヲ得ス天下之カ爲ニ益擾亂シテ糜爛鼎沸ノ勢トナル然レトモ正議漸ク勢ヲ得テ世局一變シ中興ノ事業將ニ成ラントスルノ際料ラスモ崩御シ給ヒ今上皇帝御位ヲ嗣カセ給ヒテ明治ノ盛世トナリ内國モ治マリ外交モ親シク成リタリ此ノ形勢ヲ御目擊遊ハサレシナラハ少シハ御安心遊ハサル、コトモ有リシナランニ右ノ如ク御蚤世遊ハサレシハ尤モ痛惜シ奉ル次第ナリ

紀元節日講話

紀元節ハ神武天皇即神日本磐余彦火火出見天皇御即位ノ  
禮ヲ行ヒ給ヒシ月日ニ相當セルヲ以テ之ヲ一大祝日トシ  
テ寶祚ノ元始ヲ祝ヒ給フ所ノ佳節ナリ我天皇陛下ハ此日  
ヲ以テ御親祭ノ典ヲ行ハセ給ヒ御神樂ヲ奏シ百官ヲ召シ  
テ酒饌ヲ賜フ我國臣民ノ宜ク欣躍抃舞シテ祝意ヲ表シ奉  
ル可キ時ナリトス

元ハ元始ノ義ナレトモ又年號ノコトニモ用フルコトトナレ  
リ此ノ紀元トハ即神武天皇ノ御即位ノ元年ヲ其由テ起ル  
所トシ數ヘテ今年ニ至レハ二千五百五十二年トナル此ノ  
紀元ノ始マル日タルヲ以テ紀元節ノ名トセル者ト見エタ  
リ此ノ紀元以來二千五百五十二年ヲ經タルコトノミニテ  
モ萬國ニ卓越シタル寶祚ノ悠久ナル者ナリト雖モ我皇室

ノ我日本ニ君臨シ給フコトハ此ノ紀元節ノ由テ始マレル  
際ニ始マル者ニ非ス紀元前ノ年數ハ今詳ニスルコトヲ得  
スト雖モ其綿邈ナリシコトハ更ニ言フコトヲ須ヒス此事  
ハ余カ著セル考古日本殊ニ其自序ニ於テ辨明セリ然ルニ  
此天皇ノ御世ニ至リテ神武ノ御威力ヲ以テ天業ヲ恢弘シ  
天下ニ光宅シ美地ヲ撰ヒ帝都ヲ奠メ此ヨリ先キ未タ嘗テ  
有ラサル所ノ御即位ノ禮ヲ行ヒ給フナト舊邦ナリト雖モ  
恰モ一新セル者ノ如シ是ニ於テ此天皇ヲ稱シ奉リテ始駁  
天下之天皇ト曰フ皇室ノ基ヲ創立セル者ノ如シ故ニ或ハ  
誤テ我皇室君臨ノ始トスルニ至ル者ナキニ非ス其然ラス  
シテ稱讚ノ辭ナルコトハ崇神天皇ヲモ亦御肇國天皇ト曰  
フニ付テモ亦明白ナリトス

此祝日ハ明治五年ニ始マレリ全年十一月十五日ヲ以テ第一月廿九日神武天皇御即位相當ニ付祝日ト被定例年御祭典被執行候事ト布告セラレ又翌六年一月四日ヲ以テ今般改曆ニ付人日上巳端午七夕重陽ノ五節ヲ廢シ神武天皇御即位日天長節ノ兩日ヲ以テ自今祝日ト被定候事ト布告セラレ全年三月七日ヲ以テ神武天皇御即位日紀元節ト被稱候事ト布告セラレ全年二百五十八號布告ヲ以テ祭祀日ヲ改定シ七年以後二月十一日ヲ以テ紀元節トセラレ其以來今日ニ至ルマテ變更スルコトナシ

神武天皇ノ即位ノ禮ヲ行ヒ給ヒシハ辛酉ノ春正月庚辰朔ノ事ナリキ此ヨリ後我朝ニ於テハ辛酉ノ年ニ當ル毎ニ必ス改元ノ典ヲ行フコトハ蓋此ニ本ツケル者ナラン是ハ詩

緯推度災ニ戊午革運辛酉革命甲子革政ト曰ヘルニ符合セ  
ル者ニシテ辛酉ノ歲ハ皇室ニ於テ古來戒慎シ給フ例ナリ  
ト承リヌ但此時ニ當リテハ緯書ノ説モ未タ我邦ニ傳ハラ  
サル可ケレハ自然ニ相合シタル者ナラン

此即位ノ禮ヲ行ヒ給ヒシ處ハ則大和國橿原ナリ今ノ葛上  
郡柏原村ニ在リテ畝傍山ノ東南ニ當ル地ナリ此地ヲ撰定  
シ有司ニ命シテ帝宅ヲ經リ始メ給フ此ヨリ先キ天皇下令  
曰自我東征於茲六年矣賴以皇天之威凶徒就戮雖邊土未清  
餘妖尙梗而中洲之地無復風塵誠宜恢廓皇都規摹大壯而今  
運屬屯蒙民心朴素巢棲穴住習俗惟常夫大人立制義必隨時  
苟有利民何妨聖造且當披拂山林經營宮室而忝臨寶位以鎮  
元々上則答乾靈授國之德下則弘皇孫養正之心然後兼六合

以開都掩八紘而爲宇不亦可乎觀夫畝傍山東南樞原地者蓋國之塊區乎可治之トアリ又舊事記ニ據レハ太玉命天富命率手置帆負彥狹知二神之孫以齋斧齋鉏始採山材構立正殿トアリ其後遷都モ數々アリテ此正殿ハ夙ニ廢壞シ若クハ撤去セラレテ久シク田圃トナリシカ近來有志ノ人ノ建議ニ由リ故宮ノ遺址ト覺シキ處ヲ相シ神殿ヲ建テントセシカ朝廷ヨリハ西京ノ皇居ニ在リシ内侍所ノ建造物ヲ賜ヒ之ニ修繕ヲ加ヘテ以テ樞原神宮トナシ神武天皇ヲ鎮祭シ奉ラントス潤次郎昨年ノ夏ヲ以テ此地ニ過リ新宮ヲ拜スルコトヲ得タリ

御即位ノ時ノ御儀式ハ日本書紀ニハ見エス舊事記ニ據レハ天富命率諸忌部捧天璽鏡劍奉安正殿矣天種子命奏神代

古事天神壽詞也宇摩志麻治命率内物部乃暨矛楯嚴增威儀道臣命帥來目部帶仗掌其開闔衛護官門矣並使四方之國以觀天位之貴亦俾率土之民以示朝廷之重者也于時皇子大夫率臣連伴造國造而賀正朝拜矣凡厥建都即位踐祚賀正如是之儀並始此時也トアレハ此時ノ大禮ハ音ニ即位ノミナラス建都賀正ノ儀ヲ兼子タル者ナリ日本書紀通證ニ海東諸國記ヲ引テ辛酉正月庚申始號天皇トアルヲ見レハ此ノ尊號モ亦此ノ時ニ起レルナラン又其前年媛蹈鞬五十鈴媛命ヲ納レテ正妃トナシ給ヒシカ此時之ヲ尊テ皇后トナシ給フ皇后ノ尊號モ此時ニ起レルモノト見ニ其盛典ナルコト想像スルニ足レリ

此天皇ハ十五歳ノ時立テ太子トナリ給ヒ四十五歳ノ御時

東征シ給ヒ中間六年ヲ經テ御即位ノ御時ハ五十二歳ニテ  
マシマシ御在位七十六年ニシテ崩シ給フ御年ハ一百二十  
七歳ト申ス古事記ニハ壹百參拾漆歳トス此ノ如キ御高齢  
ニ至ルマテ帝位ニ座マシシヲ以テ御威徳ハ四海ノ人心ニ  
洽子ク萬世不易ノ基礎是ニ於テ定マレリ然リト雖モ此猶  
我カ皇祖皇宗積徳ノ發スル所ニシテ天祖ノ所謂寶祚之隆  
當與天壤無窮ト曰ヘル御遺訓ノ範圍ヲ出テス盛ナリト謂  
フ可シ

彼ノ海外諸國ノ帝王大抵姓ヲ易ヘサル者ナク隣國ノ支那  
ノ如キハ三皇五帝以來帝祚ハ猶傳舍ノ如ク米國佛國ノ如  
キ統領ヲ置ク者アリテ其統領モ年限サヘアルニ至ル豈ニ  
二千五百五十二年前我皇室ノ御祖先ノ御即位ノ日ヲ紀念

トシテ之ヲ祝シ奉ルカ如キ吉祥ノ例アラシヤ

### 神武天皇祭日講話

本日ハ我國ノ皇太宗神日本磐余彥尊即神武天皇ノ崩御ノ  
日ニ値レリ日本書紀ヲ按スルニ天皇ノ七十六年春三月甲  
午朔甲辰崩ストアレハ恰モ舊曆ノ三月十一日ノコトナリ  
新舊曆ニ八年ニヨリ不同アルコトナレハ本日ハ舊曆ノ七  
日ニシテ十一日ニ非サルモ一タヒ四月三日ト定メラレシ  
ヨリ以來此日ヲ以テ御親祭ノ典ヲ舉行シ給フ我天皇陛下  
ノ此祭典ヲ舉行シ給フコトハ御父孝明天皇ヲ祭ラセ給ヘ  
ルト同シク陛下ノ御大孝ヲ申サセ給フコトニシテ孝明天  
皇ハ其尤モ近キ御方神武天皇ハ人皇中ノ尤モ遠キ御方ニ  
テマシマセハ同一系ニシテ唯遠近ノ差アルノミ

然ルニ我天皇陛下ノ尤モ御身近キ御方ト皇靈祭トヲ除キ  
國祭日ノ祭典ニ列セラレ給フハ神武天皇御一方ナリトス  
此豈ニ天皇ノ盛徳大業我國體ノ元始ニテマシマス故ニ非  
スヤ而シテ此天皇ノ盛徳大業我國體ノ元始ニテマシマス  
所以ノ者ハ記紀等ノ古典ニ詳ナルノミナラス潤次郎嘗テ  
紀元節日ニ値リ其ノ概略ヲ述ヘタルヲ以テ爰ニ復言フ可  
キノ必要ナシト思フ

潤次郎客歲ノ四月ヲ以テ西游シテ大和ニ至リ畝傍山下ノ  
御陵ヲ拜スルコトヲ得タリ此域ハ少ク隆起スト雖モ略平  
坦ニシテ他ノ山陵ノ如クナラス四方ニ柵ヲ立テ溝渠ヲ繞  
ラシ石ヲ疊テ其岸トス他ノ山陵ハ明治以後ニ修補シタル  
者少カラスト雖モ神武陵ハ夙ニ徳川幕府ヨリ戸田氏ニ命

シテ修補セシメタル者ナリ然レトモ此御陵ハ他ノ山陵ノ  
如ク地勢ニ異狀ナキヲ以テ當時此地ノ果シテ御陵ナルヤ  
否ヲ判定スルコト容易ナラサリシ由土人ノ言傳フル所ナ  
リ勿論天皇ノ御陵ハ古史ニ葬畝傍山東北陵トアレハ其方  
位ハ已ニ定マレリト雖モ東北ノ内何レノ地ノ果シテ御陵  
ナルコトハ明白ナラス而ルニ今ノ御陵ノ地ヨリ村民往々  
土器ノ祭器ノ如キ者ヲ掘リ出セルコトアルヲ以テ終ニ此  
地ヲ以テ御陵ト定メタル由ニ聞ケリ此ノ如ク當時御陵地  
ノ判然シ難キ所以ノ者ハ一ニハ年代ノ久遠ニ由リ一ニハ  
中國ニ於テ御陵ヲ作ルノ始ナルヲ以テ御陵ノ制未タ備ハ  
ラサルニ由リ又一ニハ王室ノ漸ク式微ナルニ由リ古ノ陵  
戸ナトモ退轉シテ樵採禁スルコトナク隨テ尋常ノ耕地ト

別異スルコトナクナリテ朝廷ノ宗廟トモ謂フ可キ山陵ニ  
テアリナカラ祭祀モ行ハレスシテ一時此ノ如キ景況トナ  
リタルハ實ニ慨歎ノ至ニ堪ヘス古昔山陵ニハ荷前ノ幣ヲ  
奉リタルコトアレトモ此モ近陵近墓ニ止リ遠陵ニハ只天  
智天皇ノ御陵ニノミ此幣ヲ奉リテ開國ノ天皇トモ稱シ奉  
ル可キ神武天皇ノ御陵ニ至テハ此コトナカリシト見エタ  
リ  
然レトモ開國ノ天皇トモ稱シ奉ル可キ天皇ノ御陵ノ荒廢  
シテ知ル可カラサルカ如キハ我國臣民ノ心ニ於テ安カル  
可キコトニ非サレハ有志ノ士ハ之ヲ痛論セリ皇室ノ衰頹  
セル日ニ於テ此等ノ事ハ人心ヲ刺戟シ遂ニハ在上ノ人ノ  
心ヲモ動カシ前ニ言ヘルカ如キ御陵修補ノコトアルニ至レ

リ萬延某年御陵祭ノ式始メテ行ハレ德大寺實則勅使トナ  
リテ御陵ニ赴ケリ其年ノ三月十一日我孝明天皇ニハ京師  
清涼殿ノ東庭ニ出御マシマシ遙拜ノ式ヲ行ヒ給テヨリ以  
來年々ノ御例トナリ明治中興ノ後ニ至テ元年ノ三月十一  
日ニハ愛宕通祐宣命使ヲ以テ御陵ニ發向シ全二年三月十  
一日ニハ橋本實麗宣命使トナリ全三年ノ三月十一日ヨリ  
神祇官ニ於テ御親祭ノ典ヲ行ヒ給ヒ且勅使ヲ山陵ニ遣ハ  
シ給フ全四年三月七日ノ布告ニ神武天皇御祭典ノ儀海内  
一同遵行被仰出候條毎年三月十一日各地方官ニ於テ遙拜  
式可執行事トアリ此ハ遙拜式ノコトナレトモ其本ハ御親  
祭ノ意ヲ擴充シタル者ナリトス改曆以後ハ陰曆ノ三月十  
一日ヲ以テ陽曆ノ四月三日ニ相當スル者ト定メ年々變更

スルコトナシ又神祇官廢セラレテヨリ以來ハ宮中ニ於テ  
此儀ヲ行ヒ給フ全十二年ニ至テハ御祭場ニ於テ大和舞ヲ  
奏ス此ノ如ク禮典漸ク備ハリ今日現行ノ御儀式トナレリ  
嘗ニ我皇室ニ於テ皇太宗在天ノ御靈ヲ慰シ奉ル可キノミ  
ナラス我國臣民ノ心モ此ニ由テ以テ始メテ安スルコトヲ  
得ヘシ

潤次郎已ニ御陵前ニ至リ俯伏シテ拜シ奉リ畢テ再ヒ橿原  
新宮ノ地ニ過リ高取ノ城下ヲ過キ峻阪ヲ越エテ吉野川ニ  
臨ミ川ヲ越エテ吉野ニ至レリ吉野ノ山ニ入テ行クコト五  
十町峻絶ノ地ニ非ルモ兩脚酸麻シテ殆行クコト能ハサラ  
ントス而シテ四望山壑回環峰巒重疊之ヲ望ムニ其極マル  
所ヲ知ラス蓋此地ハ即我神武天皇ノ紀伊國ヨリ舟ヲ捨テ

上陸シ給ヒ熊野ヨリ大和ニ入り給ヘル處ナリ古史ニ曰ヘ  
ル皇師欲趣中洲而山中險絶無復可行之地乃捷遲不知其所  
跋涉等ノ事ヲ憶ヒ起セハ天皇ニハ如何計ノ御艱難ヲ嘗メ  
給ヒテ始メテ開國ノ御大事業ヲ成就シ給ヘルモノナルカ  
二千五百餘年ノ後太平無事ノ時ニ在テモ猶跋涉ニ困難ナ  
ル險絶ノ地ヲ草昧ノ際無人ノ地ヲ越エテ兇徒ヲ亡シ天下  
蒼生ヲシテ悉ク王化ニ霑ハシメ給フ御艱難ノ程恐察シ奉  
ルニ餘リアリキ

### 皇靈祭日講話

皇靈殿ノ由テ始マル所ヲ考フルニ明治二年六月二十八日  
聖上御親ヲ百官群臣ヲ率井テ神祇官ニ行幸マシマシ天神  
地祇及歷朝ノ皇靈ヲ御親祭在セラレ祭政一致ノ教旨ヲ以



テ國是ノ大基礎ヲ定メラレシユトヲ告ケ奉リ遂ニ神祇官  
中ニ神殿ヲ建サセ給ヒ全年十二月十七日ヲ以テ八神及天  
神地祇ト共ニ歷朝ノ皇靈ヲ此神殿ニ鎮祭シ給フ其翌年即  
三年正月三日此神殿ノ御前ニ於テ祭典ヲ行ハセラレ鎮祭  
ノ詔ヲ下シ其後明治四年九月十四日更ニ詔ヲ下シテ皇靈  
ヲ賢所ニ移シ御同殿トナシ給ハントス其詔ニ曰ク

朕恭ク惟ルニ神器ハ天祖威靈ノ憑ル所歷世聖皇ノ奉  
シテ以テ天職ヲ治メ給フ所ノ者ナリ今ヤ朕不逮ヲ以  
テ復古ノ運ニ際シ忝ク鴻緒ヲ承ク新ニ神殿ヲ造リ神  
器ト列聖皇靈ヲ茲ニ奉安シ仰テ以テ萬機ノ政ヲ視ム  
ト欲ス爾群卿百僚其レ斯旨ヲ體セヨ

全月十三日皇靈ヲ宮中ノ賢所ニ遷坐シ奉ル此時故三條太

政大臣ヲ勅使トシテ大前ニ白サシメ給ヘル宣命ノ文ニ曰  
ク

天皇等ノ大御靈ヲ前年此神床ニ座セ奉リテヨリ天皇  
大御自カラ祭ヲセ給ヒ齋キ給ヒ官官怠ルナク過ツコ  
トナク仕ヘ奉ラシメ給フ物カラ古ノ則ノ任ニ改メ正  
シ厚ク尊ミ親シク祭ヲセ給フトシテ今年ノ九月ノ今  
日ノ生日ノ足日ニ大朝廷ノ内ニ座ス天津璽ノ神寶ノ  
全シ神床ニ座奉ラムカ爲ニ云々

是時ノ賢所ハ宮中山里ノ御内庭ニ在リシカ明治六年皇居  
炎上ノ後賢所ハ赤坂ノ假皇居ニ遷ラセ給フニ由リ皇靈殿  
モ其地ニ遷レリ此時ニ至ルマテ皇靈ハ歷朝ノ祖宗ノ靈ノ  
ミナリシカ明治十年更ニ歷朝ノ皇后皇妃皇親ノ靈ヲモ皇

靈殿ニ合祭シ又明治十八年後ニ尊號ヲ上レル天皇ノ靈ヲ合祭セシメ給フ明治二十二年皇居ヲ今ノ宮城ニ遷サセ給フニ由リ皇靈殿モ從フテ今ノ賢所ノ地ニ御鎮座アリ茲ニ一ツノ注意ス可キコトアリ此皇靈祭ハ二ツノ禮典ヲ含有スルコト是ナリ其一ハ即皇靈祭ニシテ其字ノ義ヲ表スルカ如ク又上ニ述フルカ如キ禮典ナリ其一ハ即神殿祭ニシテ此神殿祭ヲ更ニ細分スレハ八神ト天神地祇トノ二祭典ヲ行フ所ノ者ナリトス八神ト天神地祇トハ古來ヨリ皇室ニ行ハル、所ノ祭典ナレトモ各別ニ之ヲ行ヒ來リシヲ明治五年ノ十一月此兩座ヲ合祭シテ單ニ神殿ト稱ス然レトモ御親祭ハアラサリキ明治十一年九月秋季皇靈祭ニ至リ始テ嚴重ナル式ヲ以テ御親祭在ラセラレ翌十二年ノ

春季皇靈祭モ御親祭ナリシカ神殿祭ハ前例ニ依リ猶未タ親祭ノ儀ヲ行ヒ給ハス全年ノ秋季皇靈祭ニ至リテ皇靈殿神殿共御親祭ト定メラレ此ヨリ始テ現行ノ大典トナレリ此大典ニハ我天皇陛下ノ祖宗ニ對シ奉リ大孝ヲ申サセ給フト全時ニ神祇尊崇ノ禮ヲ行ヒ給フ者ナリ祖宗ト神祇ト共ニ尊崇ス可キコトハ言ヲ待タスト雖モ此二者ヲ並ヘ舉ケタルノ先例モ亦少カラス日本書紀神功皇后紀ニ吾被神祇之教賴祖宗之靈浮涉滄海躬欲西征トアリ敏達天皇紀蝦夷ノ盟曰若違盟者天地諸神及天皇靈絕滅臣種矣ト續日本紀聖武天皇紀朕賴神祇之祐蒙宗廟之靈久有神器誕皇子又全十八年ノ勅語ニ乾坤垂福宗社降靈トアリ孝謙天皇紀二年ノ詔賴宗社威靈遠從殲殄トアルカ如キ是ナリ上文ノ如

ク本日ノ祭典ハ皇靈殿及神殿ノ御祭典ニシテ賢所ニハ御祭典ナキモノ者ト心得可シ  
更ニ皇靈祭ノ一邊ニ反リテ之ヲ詳カニセシニ此皇靈祭ハサマテノ古典ニ非サルコト上文ニ詳ナリ然レトモ我皇室ニ於テ祖宗ノ祭典ヲ行ヒタルコトハ蓋上古已ニ之アリ神武天皇ノ時ニモ大和平定ノ後間モナク皇祖ヲ祭リ大孝ヲ申サセ給ヒシコトアリ其時ノ詔ニ曰ク我皇祖之靈也自天降靈光助朕躬今諸虜已平海内無事可以郊祀天神用申大孝者也トアリ此等ヲ始トシテ天武天皇ノ十年五月朔皇祖御魂ヲ祭リ給ヘルカ如キハ正史ノ載スル所ニシテ皇靈及皇親ノ靈ヲ特ニ尊崇セルコトハ應神天皇ヲ八幡宮ニ齋キ奉リ後鳥羽天皇ヲ水無瀬宮ニ豊城入彦命ヲ二荒山神社ニ日

本武尊ヲ大鳥神社ニ齋キ奉ルノ類外ニモ猶多カル可シ次テハ荷前ノ祭アリ歳末ニ方リ御調ノ物ヲ擇ミ之ヲ幣物トシテ神社及歴代ノ山陵ニ奉ル蓋本邦ニテハ支那ノ制ノ如ク別ニ宗廟ヲ設ルコトナク山陵ヲ以テ宗廟トナシタリシカ山陵ノ數已ニ多シシテ發遣ス可キ勅使ノ數モ足ラサル故支那ノ五世ニシテ親盡ルノ例ニ本ツキ當時ノ天子ニ親キ御方方ノ陵墓ニノミ荷前ノ使ヲ發遣シ給ヘリ是即清和天皇ノ御時十陵四墓ノ制ヲ定メラレシ所以ナリ後ニハ十陵ハ五陵トナリ四墓ハ八墓トナル等ノ沿革アリタレトモ概シテ近陵近墓ニノミ此典ヲ行ヘリ只天智天皇ハ遠シト雖モ猶此典ニ列セリ盖中興ノ宗ニシテ支那ノ百世不遷ノ廟ヲ設クルノ意ニ類スル者ナル可シ而シテ此荷前ノ使ニ

膺ル者ハ大臣參議以上ノ人ニシテ其典禮ノ重キコト知ル可シ然ルニ保元平治以來朝廷ノ衰フルニ從テ此禮モ年々行レス然レトモ猶折折ハ行ハレタルコトアリケレトモ足利氏ノ季世ニ至テハ全ク廢止セリ夫ヨリ以來ハ祖宗ノ御祭ニ盛大ナル典禮ハアヲサリシヲ近日ノ皇靈祭ヲ以テ大孝ヲ申ラレ皇靈殿ハ支那宗廟ノ制ノ如キ者トナリテ尤其制ヲ完備シ給ヘリ

祖宗ノ祭典ヲ春秋兩度ニ行ヒ給ヘルコト亦其例ナキニ非ス神皇實錄ニ神日本磐余彥天皇甲子四年春二月壬戌朔甲申ノ日ニ詔シテ皇天ノ嚴命ニ任テ八柱ノ靈神ヲ齋キ式テ鎮御魂神ト爲シ天皇ノ玉體ノ爲ニ春秋二季ニ齋キ奉ルト云コトアリ此神皇實錄ハ異議ヲ容ル者モアレトモ北畠准

后ノ元々集ニ此事ヲ援ケルヲ以テ一證トスルノミ又桓武天皇ノ大同元年三月十七日祖道天皇ノ御爲ニ諸國ノ國分寺ノ僧ヲシテ春秋二仲月ニ七日間金剛般若經ヲ讀マシムルコトアリ是蓋佛家ノ說ニ本ツナル者ニシテ夫ノ彼岸會ト云フ者ニ近シトス此彼岸會ハ今日モ猶民間ニ行ハル、者ニシテ彼岸ノ語モ亦佛語ニ出テタル者ナリ生死ヲ此岸トシ涅槃ヲ彼岸トシ煩惱ヲ中流トシ波羅蜜ヲ到彼岸トスト云ヘリ佛家ニハ春分秋分ノ日ヲ中日ト稱シ其前後各三日通シテ七日ノ間通俗共ニ諸佛ニ詣テ亡靈ヲ供養ス或ハ春分前五日ヨリ數ヘテ七日秋分前一日ヨリ數ヘテ七日ヲ彼岸ト稱スル者アリ又佛家ノ說ニハ菩薩無相ノ智慧ヲ以テ禪定ノ舟航ニ乘シ此岸ヨリ彼岸ニ到ラシムト云フ貝原

氏ノ歲時記ニハ其說ヲ妄誕無稽ナリトシテ之ヲ辨駁セリ  
又埃囊鈔ニ據レハ春秋分ハ晝夜等分舟ノ兩岸ノ中央ニ在  
ルカ如シ彼岸此岸相齊キ故或ハ比岸ト稱ストアリ是ハ彼  
岸ヲ佛家ノ語ニ非スシテ曆家ノ語トスル者ノ如シ未タ孰  
カ是ナルコトヲ知ラス彼岸ト曰ヘル語ハ蜻蛉日記ニモ見  
エテ此書ニハ村上天皇ノ天曆年間ヨリ圓融天皇天延年間  
ニ至ルマテノコト共ヲ載セタルハ今ヲ去ルコト九百數十  
年ナリ彼岸會シ由テ來ルコト久シキコト知ル可シ此彼岸  
ニ亡靈ヲ祭ルコトハ固リ佛說ナレトモ其コトハ人情ノ自  
然ニ本ツキタル者ト見エテ支那ニ於テモ之ニ類スルコト  
アリ禮ノ祭義ニ霜露既降君子履之必有悽愴之心非其寒之  
謂也春雨露既濡君子履之必有怵惕之心如將見之時ニ感シ

テ親ヲ思フハ自然ノコトニシテ春秋兩度ノ祭ハ此ヨリ起  
レル者ナル可シ而シテ中庸ノ第十九章ニモ春秋修其祖廟  
陳其宗器設其裳衣薦其時食トアルヲ見レハ周代ニハ巳ニ  
春秋兩度ノ祭ヲ行フコト知ルヘシ後世文公家禮ノ如キ者  
ニモ時祭ト云フコトアリテ四季ノ仲月ヲ用ユレトモ定マ  
リタル日トテハナクト筮ニ由テ之ヲ定ムルコトナルカ温  
公書儀ニ據レハ孟氏家祭儀用ニ至二分若不暇ト日止依孟  
儀用分至於事亦便也トアリ是亦支那ニテ春分秋分ニ亡靈  
ヲ祭ルノ明徴ナリ此等ハ固リ皇靈祭ト全シト曰フニ非サ  
レトモ春秋ニ亡靈ヲ祭ルコトニ於テハ異ナルコトナシ此  
即人情ノ同ク然ル所ナリ論語ニ慎終追遠民德歸厚矣ト曰  
ヘルコトアリ畢竟終ヲ慎ミ遠ヲ追フコトハ人情ノ全ク然

ル所ナレハ在上ノ人此ヲ以テ之ヲ率非ルコトヲ得可シ若シ人情ノ全ク然ル所ニ非サラシメハ縱令ヒ在上ノ人終ヲ慎ミ遠ヲ追フトモ民徳ノ厚キニ歸スルコトハ期ス可カラサル可シ

神嘗祭日講話

神嘗祭ハ普通ニハ音讀ナレトモ或ハ之ヲ「かんなめまつり」ト曰ヒ或ハ「かんにへまつり」トモ曰フ又延暦ノ頃ニハ相嘗トモ曰ヘリト云フ新穀ノ熟シタル者ヲ伊勢ノ皇太神宮ニ供ヘ奉ルノ御祭典ニシテ年々御使ヲ遣ハサレ天皇陛下ハ御遙拜式ヲ行ヒ給フ此ハ毎年行ハルルコト故中古ニテハ之ヲ例幣ト稱シ又其使ヲ稱シテ例幣使ト曰フ此祭典ハ前ニ言ヘルカ如ク新穀ヲ薦ムルコトタルハ勿論ナレトモ此

新穀ハ御酒トシ御饌トシテ之ヲ奉ル且嘗ニ新穀ヲ薦ムルノミニ非スシテ併テ幣帛及荷前ノ調絹ヲ奉ルノ例ナリ荷前ノコトハ前ニ皇靈祭ノ條ニ言ヘルカ如ク人民ノ貢納セラル者ノ中ヨリ抽テタル者ナリ此品ハ古昔租庸調ノ法ノ行ハレタル時調ノ中ヨリ選ミ取ルコトヲ得レトモ此法ノ廢レシヨリ以來ハ所謂調絹ナル者ハ得ヘカラサルヲ以テ今日ノ幣帛ハ皆特ニ命シテ造ラシメタル者ナリ  
古來我國皇室ノ御祭典ニハ三種ノ別アリテ大祀中祀小祀ニ分テリ此神嘗祭ハ彼ノ祈年祭月次祭新嘗祭加茂祭ト共ニ中祀ニ屬ス大祀トハ只大嘗會ノ一ツアルノミニシテ此大嘗會ハ御一代ニ一度行ハセ給ヒ然カモ御一代ニ一度ナカリシコトモ多クアル位ノコトナレハ此中祀ハ名ハ中祀

トハ日へ重キ御祭典ナリト知ル可シ大寶ノ制ニ據レハ大  
祀ハ一月齋ス中祀ハ三日齋ス小祀ハ一日齋ストアリテ各  
其差別アレハ彼大忌祭風神祭鎮華祭以下十一ノ御祭典ノ  
小祀ニ屬スル者ノ比ニ非ラス

天照大神ハ我皇室ノ御先祖ニマシマシテ御功德ノ盛大ナ  
ルコトハ今更申迄モナシ此天祖ニ對シ奉リ新穀ヲ薦ムル  
ノ御祭典ヲ行ヒ給フコトハ無量無邊ノ御功德ノ萬一ヲ報  
謝シ奉ラントスルノミナラス上古嘉穀ノ種ヲ得サセ給ヒ  
之ヲ蒼生ノ食ト定メ給ヒ其齋庭ノ穗ヲ天孫ニ授ケ給ヒシ  
ヨリ人民ニ遍ク播種セシメテ我國ノ蒼生ハ食ヲ得テ生ヲ  
安スルコトヲ得タルコトナレハ殊ニ此御恩澤ニ對シ拜謝  
シ奉ル御思召ヲ表章セラル、コトナル可シト竊ニ思惟シ

奉ル將又伊勢ノ外官即豐受大神ハ穀食ヲ司リ給フ所ノ御  
神ナレハ外官ニ於テ先ツ此祭典ヲ行ヒ給フ此外官ノ由來  
ヲ尋ヌルニ雄略天皇ノ御時天照大神天皇ノ夢ニ之ヲ教ヘ  
テ曰ク丹波國比沼ノ眞名井ニ坐ス吾カ御饌津神豐受神ヲ  
我カ許ニ欲シトアルニ由リ此豐受神ヲ丹波國ヨリ伊勢ノ  
山田原ニ移シ給フ此神ハ天照大神ノ殊ニ重シ給フ所タル  
ニヨリ其御所縁ヲ以テ神嘗祭ニ於テモ外官ノ御祭典ヲ内  
官ヨリモ前ニ行ハセ給フナル可シ

此御祭典ノ起原ハ詳ニ知ルコトヲ得ス天曆勘文ニ垂仁天  
皇ノ御世ニ始マルト曰ヘトモ他書ニ其事ヲ載セス大寶ノ  
制ニ九月祭ヲ行フ神衣祭ノ使ヲシテ之ヲ祭ラシムトアル  
ハ蓋書傳ニ見エタル始メナル可シ又元正天皇養老五年九

月十一日天皇内安殿ニ御シテ使ヲ遣ハシテ幣帛ヲ伊勢大神宮ニ供セシムトアリ是レ十一日ヲ以テ幣使發遣ノ日トスル始ナラン此御儀式ノ詳ナルコトハ延喜式江家次第等ノ書ニ見エテ清和天皇貞觀ノ頃ヨリ後三條天皇ノ延久年中ニ至ルマテ稍異同アリト雖モ要スルニ大同小異ナリ聖武天皇ノ天平二年閏六月甲午ノ日幣ヲ伊勢大神宮ニ奉ル使ハト食ノ五位已上ノ者ヲ用井六位已下ノ者ヲ用井サ  
ルノ制ヲ定メ給フ此奉幣使ヲ遣ハス時ニハ天皇大極後殿ニ御シテ之ヲ拜シ給フコトアリ大極後殿ハ又後房ト云フ即小安殿ノコトナリ其日昧爽掃部寮御坐ヲ小安殿ノ東第三ノ間ノ中央ニ設ケ其東壁ノ下ニ幣ヲ置キ葉薦ヲ鋪キ其東南壇下ニ白砂ヲ鋪キ中臣忌部ノ版位ヲ置ク殿西第一ノ

間北壁外ニ簀一枚ヲ置キ二ノ間ニ幣ヲ裹ム葉薦ヲ鋪キ其左右ニ長席ヲ鋪テ幣ヲ裹ム者ノ座トシ三ノ間北壁下ニ内侍座ヲ鋪キ其南ヲ闕司座トシ東廊ニハ參議已上座北廊ニ少納言辨座其西ニ外記史座其後ニ史生官掌座ヲ設ク内藏寮官人内侍ノ裏ミ備フル幣物ヲ取テ葉薦ノ上ニ置ク大神官ノ幣ハ北ニ在リ豐受官ノ幣ハ南ニ在リ期ニ至テ天皇御湯訖テ祭服ヲ着テ殿ノ御座ニ御シ先ツ御幣ヲ拜シ給ヒ少納言ヲシテ中臣忌部ヲ喚シム中臣鬘木綿ヲ着ケ忌部木綿襪ヲ懸ケ共ニ稱唯シテ照訓門ヨリ東福門ヲ經テ各版ニ就ク中臣前ニ在リ忌部後ニ在リ後執一人忌部ニ從フ忌部勅ニ依テ稱唯シ殿ニ升リ跪テ手ヲ拍ツコト四段先ツ豐受官ノ幣ヲ取テ後執ニ授ケ次ニ復手ヲ拍チ自ラ大神官ノ幣ヲ



執テ版ニ復ル中臣又勅ニ依テ稱唯シ殿ニ升リ跪ク時ニ天皇能ク申シテ奉レト詔フ中臣稱唯訖テ各退出忌部前ニ在リ後執之ニ次キ中臣之ニ次ク其後左右馬寮馬四疋ヲ率立ツ時ニ使ノ王ヲ召テ宣命ヲ給ヒ了テ乘輿官中ニ還リ給フニ躡シテ警ムルコトナシ即日使等神官ニ向フ十六日度會ノ宮十七日大神宮ヲ祭リ二十日ニ至テ復命ス延喜ノ制亦此ノ如シ其祭幣大神宮ニ錦兩面各一疋深紫綾淺紫綾緋中綠綾黃綾白綾各一疋度會宮ニハ緋中縹黃皂帛各一疋ヲ奉リ其使ノ諸王及ヒ中臣忌部ニハ各當色ヲ賜ヒ執幣者五人從者三人ニハ並ニ潔衣ノ布一端ヲ賜フト云フ

其後崇徳天皇ノ保延元年ニ式部大輔藤原敦光内大臣藤原宗忠等奏シテ式條ノマ、ニ天皇御躬ツカラ神嘗祭ヲ行ハ

セ給ハンコトヲ請フテ行ハレサリシコトアリ其儀ノ古禮ニ遵ハサリシコト見ル可シ後鳥羽天皇ノ元暦元年例幣ノ時天下大ニ亂レタルヲ以テ諸國ノ幣料制ノ如クナラスト云フ以後朝廷ノ衰フルト共ニ古禮廢レテ行ハレサルコト數百年ニ及ヘリ後光明天皇ノ正保四年詔シテ此御祭典ヲ行ヒ給ヒシヨリ毎年九月十一日ヲ以テ勅使ヲ發遣シテ神宮ヲ祭ルコト連綿トシテ絶エス孝明天皇ノ嘉永年間ノ御式ハ先三日前ヨリ御潔齋在セラレ當日上卿陣ノ御坐ニ着キ大内記ヲ召シ宣命ヲ奉ラシメ弓場ニテ職事ヲシテ奏セシム其時使ノ王御馬ノ由ヲ申ス此間朝餉ニ出御ナリテ御裝束アリ職事臺盤所ノ簾下ヨリ奏ス御覽終リテ宣命ヲ返シ給フ夫ヨリ裝束ヲ改メ伊勢へ出立セリト云フ

御祭典再興以來、南殿ヲ以テ小安殿代ニ充テ、元吉田神社ノ齋場所ヲ以テ神祇官代トナシテ其儀ヲ行ヒ給ヒ、維新ノ後神祇官再興ノ後ハ、全官ヨリ幣使ヲ發セラレタルコトアリ、且其期日ハ毎年九月十一日ナレトモ、伊勢ニ到着ノ後神宮ニ於テ幣帛等ヲ上ルノ期日ハ一定セサリシカ、明治四年ヨリ古例ノ如ク、九月十六日ヲ以テ豐受官ヲ祭リ、全十七日ヲ以テ皇大神宮ヲ祭ルコトトナリ、又全時ニ賢所ノ便殿ニ於テ神宮御遙拜ノ式ヲ行ハセ給フ、明治六年五月皇居炎上ニ付キ、赤坂ノ假皇居ニ遷ラセ給ヒシヨリハ、皇居ノ表一ノ間南庇ニ於テ御遙拜在ラセラレ、明治二十二年一月今ノ宮城ニ遷幸マシテ、後十月十七日神嘉殿ノ南庇ニテ御遙拜式ヲ行ヒ給ヒテ、ヨリ今日ノ御例トナレリ。

御儀式ノ次第變遷少カラズ、殊ニ現行ノ御儀式ノ古ニ異ナル者ハ、御遙拜是ナリ、古昔ノ御儀式ニハ奉幣使ヲ發遣シ給フ時、天皇ハ大極後殿ニ御シテ之ヲ拜シ給フコトアリ、又天皇小安殿ノ御屏風ノ東ノ御座ニテ御拜在ラセ給フ、蓋御遙拜ノ意ニ出テシモノナラン、且又嘉永年中孝明天皇ノ御儀式ニ、天皇南殿渡御アリテ、東第三ノ間ニテ伊勢神宮ノ方ニ向ハセラレ、御拜アリ、是モ御遙拜ナレトモ、俱ニ奉幣使發遣ノ時ノ儀式ニシテ、神宮ヲ祭ル時ノ儀式ニ非ス、蓋今日ハ古昔十一日ニ行ヒ給ヒシ御儀式ヲ略セルヲ以テ、御遙拜ノ儀式ヲ十七日ニ移セル者ナラン、又賢所御親祭ノコトモ、古禮ニハ見エサル所ナレトモ、猶官報ニ掲載セルカ、如キノ御次第トナレリ、是モ近日ノ御例ナルヘシ、此御祭典ハ古例トハ

雖モ沿革ナキニ非ス

支那ノ例ヲ按スルニ此神嘗祭ニ髣髴タル者上古ヨリ之アリ禮ノ少儀ニ未嘗不食新トアリ嘗トハ新物ヲ寢廟ニ薦ムルコトニシテ未タ嘗セサレハ則先ツ食フニ忍ヒスト曰ヘル註解アリ後世文公家禮等ニモ俗節則獻時食トアリテ註ニ歲熟獻新ト見エ又薦新告廟ノ語アリ且喪中ニモ有新物則薦之トアリテ其註ニ新物若五穀果品菜蔬一應新熟之物初出而未嘗者用大盤盛陳于靈座前卓子上ト見エタリ然ルトキハ此神嘗祭モ人情ノ全ク然ル所ニシテ本邦ノ此祭典モ支那ノ新物ヲ薦ムルコトモ俱ニ是報本反始ノ義ニ外ナラサレトモ本邦ニ在テハ萬世一系ノ天子ノ萬世一系ノ祖宗ニ對シ奉リ行ヒ給フ所ノ御祭典ナレハ報本反始ノ

情ニ至テハ他國ト同シカラス支那ノ周ニテ后稷ヲ祀ルコト少ク我皇室ノ伊勢神宮ヲ祀ルニ類スル所アリ后稷ノ民ニ稼穡ヲ教ヘタルハ天祖ノ嘉穀ノ種ヲ頒タシメ給ヒ豐受大神ノ穀食ヲ司リ給フコトノ如キ者ナレトモ周ハ只八百歲ニ過キスシテ其後ノ帝王ノ寢廟ニ新ヲ薦ムルハ單ニ孝道ヲ表スルニ過キサレ可シ我邦ノ神嘗祭ハ周ニテ后稷ヲ祭ルカ如キコトノ萬世ニ涉リテ變セサル者ト謂フ可シ此ノ如クナレハ則報本反始ノ情豈ニ最厚カラサルコトヲ得ンヤ

天長節日講話

天長節ハ聖上御降誕ノ日ナリ此日ニハ賢所皇靈殿神殿ノ御祭典アリ又觀兵式アリ且親王諸臣ニ宴ヲ賜フ紀元節ト

共ニ國家ノ大祝日ナリ其祭典ハ早旦ヨリ御殿ノ御裝束常  
ノ如ク開扉ノ上音樂ヲ奏シ神饌ヲ供シ掌典長祝詞ヲ奏シ  
侍從長御代拜トシテ御玉串ヲ捧ケ奉ル次テ東宮ノ御代拜  
次ニ兩皇后宮ノ御代拜アリ次ニ宮内官員ノ拜禮アリテ神  
饌ヲ撤シ御扉ヲ閉テ各退出ス其觀兵式ハ午前八時三十分  
御出門ニテ青山練兵場へ行幸在ラセラルレ各國公使以下ヲシ  
テ陪觀セシメ給フ雨天ニハ觀兵式ヲ行ヒ給ハ子ハ行幸モ  
在ラサセラルス其御祝宴ハ午前十一時豐明殿へ出御御前  
ニ於テ親王以下ニ酒饌ヲ賜フ其儀新年宴會ニ全シ但御祝  
宴中前庭ニ於テ樂師歐洲樂ヲ奏ス  
抑此御儀式ハ古例ニ基クト雖モ明治元年以來ノ御盛典ナ  
リ而シテ明治元年以來又多少ノ沿革ナキニ非ス朝政維新

ノ後明治元年八月二十六日ノ御布告ニ九月二十二日ハ聖  
上ノ御誕辰相當ニ付毎年此辰ヲ以テ群臣ニ酬宴ヲ賜ヒ天  
長節御執行ニ相成天下ノ刑戮差停ラレ候偏ニ衆庶ト御慶  
福ヲ共ニ遊ハサレ候思召ニ候間庶民ニ於テモ一同御嘉節  
ヲ祝シ奉リ候様仰出サレ候事トアリ全三年九月七日ノ御  
布告ニ九月廿六日聖上御誕辰每歲此日ヲ以テ天長節トシ  
群臣ニ酬宴ヲ賜ヒ天下刑戮ヲ停メ衆庶ト御慶福ヲ共ニ遊  
ハサレ度旨一昨年御布告ニ相成候處未タ未迄御主意貫  
徹致ササル向モ有之候ニ付府藩縣共此旨篤ト奉體シ衆庶  
一同御慶辰ヲ祝シ奉リ候様致スヘキ旨更ニ仰出サレ候事  
トアリテ全月二十日ニ神祇省ノ達書ニ來ル二十二日天長  
節御祭典ニ付神殿拜禮ノ儀諸官非職官華族等當日辰刻ヨ

リ申刻マテ差許サレ候間此旨申達候也トアリ然レトモ此御盛典ノ儀式全ク完備セルハ蓋明治五年ニ在リ此五年ノ天長節ニハ親王以下ニ宴ヲ賜ヒ舞樂ヲ奏セシメ勅語ヲ宣シ給フ勅語ニ曰ク

茲ニ朕カ誕辰ニ方リ群臣ヲ會同シ鬪宴ヲ張リ舞樂ヲ奏セシム汝群臣朕カ惜ニ樂ムノ意ヲ體シ其レ能ク歡ヲ盡セヨ

太政大臣三條實美奏任以上ノ總代トナリ從一位中山忠能華族ノ總代トナリ奉答ス其辭ニ曰ク

茲ニ天長ノ佳節ニ方リ陛下群臣ヲ會同シ鬪宴ヲ賜ヒ舞樂ヲ奏セシメ特ニ辱クモ惜樂ノ寵命ヲ拜ス群臣感喜ノ至ニ勝ヘス豈ニ歡ヲ盡シ樂ヲ極メサランヤ乃恭

ク陛下ノ聖誕ヲ祝シ萬壽無疆ヲ祈リ奉ル

同年改曆アリテ太陽曆ヲ用井ルニ至リ陰曆九月二十三日ハ太陽曆ノ十一月三日ニ值ルヲ以テ六年以後ハ十一月ノ三日ト定メラレタリ

按スルニ帝誕日ヲ令節トシ佳名ヲ設ケ鬪宴ヲ賜フコトハ類聚國史ニ見ニ其文ニ曰ク

光仁天皇寶龜六年九月壬寅勅十月十三日是朕生日每至此辰感慶兼集宜令諸寺僧尼每年是日轉經行道海内諸國並宜斷屠内外百官賜鬪一日仍名此日爲天長節庶便廻斯功德奉度先慈以此慶情普被天下

十月癸酉天長節大鬪群臣獻翫好酒食宴畢賜祿有差十年十月巳酉當天長節仍宴群臣賜祿有差

又按スルニ唐實錄ニ明皇垂拱元年八月五日ヲ以テ東都ニ  
生ル開元十七年丞相源乾曜張說上表シテ以テ千秋節トセ  
シコトヲ請フ帝手詔シテ之ニ報ス帝誕日ノ令節トナルコ  
ト此ニ始マル天寶八年改テ天長節トス此蓋老子ノ書ニ見  
エタル天長地久ナトノ語ニ取テ萬壽無疆ノ意ヲ寓スル者  
ナラン我邦光仁天皇ノ寶龜六年ハ西土唐ノ代宗ノ大曆十  
年ニ値リ大曆十年ハ開元十七年千秋節ノ始ヲ距ルコト四  
十七年又天寶八年天長節ノ始ヲ距ルコト二十七年ニ値レ  
ルヲ見レハ當時ハ文物制度彼ニ取ルコトノ習ナレハ其制  
ヲ取レル者ナル可シ當時佛道盛ニ行ハレタルヲ以テ彼諸  
寺ノ僧尼ヲシテ轉經行道セシメ且屠殺ヲ禁セシムルカ如  
キ當然ノコトニシテ殊ニ母后ノ爲ニ冥福ヲ薦メ奉ルコト

ナレハ佛式ニ依テ大孝ヲ申サセ給フコトト察セラル唐代  
天長節ノ制ハ詳ナラサレトモ冊府元龜帝誕ノ條ニ據レハ  
燕享ノ禮ヲ陳子魚藻ノ歡ヲ洽子クシ又桑門ノ饌ヲ設ケ福  
田ノ事ヲ修メ公卿士庶ハ節物ヲ爲テ以テ相遺リ諸侯牧守  
ハ貢珍ヲ奉リテ來觀ストアリ然ラハ則僧尼ノ轉經行道屠  
殺ノ禁アルカ如キハ彼ノ醜宴ヲ賜ヒ祿ヲ賜フノ例ニ同ク  
皇上ノ仁慈ヲ人民禽獸ニ推シ及ホシ且ハ皇靈ノ御冥福ヲ  
修シ奉ルノ御思召ニ外ナラスシテ是トテモ西土ノ制ニ倣  
ハセラレタル者ナル可ケレトモ抑亦人情ノ全ク然ル可キ  
所ナラン近日ノ御儀式ニテハ皇靈ノ御祭典ニハ佛式ヲ用  
非給ハ又故此等ノ事ナキハ當然ナル可クシテ其代リニ賢  
所皇靈神殿ノ御祭典ヲ行ハセラル、所以ノ者ハ此意ニ本

ツケル者ト察シ奉ル又觀兵式アル所以ノ者ハ憲法第十一條ニ規定セルカ如ク天皇ノ陸海軍ヲ統帥シ給フ御大權ノ一ニ本ツキ辱クモ國家ノ爲ニ御苦勞遊ハサル、ノ一斑ヲ窺ヒ奉ルユトヲ得ル者ナリ此事ハ古例ノ無キ所ナリ又西土ニモ聞キ及ハヌ所ナリ

### 新嘗祭日講話

新嘗祭ハ天皇新穀ヲ神祇ニ奉リ給ヒ自ラモ聞シ食シ群臣ニモ賜フ所ノ御祭典ナリ日本書記古事記ニ據レハ天祖高天原ニ御座シテ五穀ノ種ヲ得サセ給ヒ之ヲ天狹田長田ニ殖シ給ヒ其後大嘗ノ殿ニ坐テ新嘗聞食シ給ヒシコトアリテ大嘗新嘗ノ字ハ始メテ見ハレタリ又天孫降臨ノ時天祖齋庭ノ穗ヲ授ケ給ヒシヨリ降臨ノ後新穀ヲ聞食スノ儀ヲ

行ヒ給ヘルコト中臣壽詞ニ見エテ大嘗新嘗ノ起源ハ遠ク神代ニ在リ然レトモ其後史乘ノ記スル所又各同シカラス景行天皇五十三年膳臣祖磐鹿六獵命御食仕奉ル時ニ若湯坐連等ノ始祖億富賣布連ノ子豐日連乎令火讚天此乎忌火止爲天伊波比由麻閉天供饗并ニ大八洲爾像天八乎止古八乎止咩定天神嘗大嘗等仕奉始支トアルヲ見レハ毎年行フ所ノ新嘗祭ハ或ハ此ニ始マレル者カ此ハ本朝月令年中行事秘鈔并ニ高橋氏文ヲ引ク者ナリ然ルニ類聚國史ニ清寧天皇三年ヲ以テ新嘗祭ノ始トシ公事根源ニ用明天皇二年ヲ以テ新嘗祭ノ始トス清寧天皇ハ神武天皇ヨリ二十三代ニ値リ用明天皇ハ三十二代ニ値リ景行天皇ハ十二代ニ値ルコトナレハ景行天皇ノ時ニ始マル者トスルト用明天皇

ノ時ニ始マル者トスルトハ先後ノ差甚大ナリトス此ノ如ク種々ノ説アル所以ノ者ハ或ハ此禮ノ中絶シテ後ニ再興セルカ又ハ其儀ヲ改メタルカ必其故アラシク今考フ可カラス仁徳天皇四十年新嘗宴會ノ日御酒ヲ内外命婦ニ賜フ皇極天皇元年十一月丁卯天皇新嘗聞食シ給ヒ皇太子及大臣各自ヲ新嘗ヲ行フ天武天皇四年八月四方大解除ヲ行ヒ九月神官ノ奏ニ依テ新嘗ノ爲ニ國郡ヲ卜定シテ尾張山田郡ヲ齋忌トシ丹波訶沙郡ヲ次トス五年十一月己卯新嘗ヲ行ヒ辛巳百僚有位ノ人ニ食ヲ賜ヒ祭ニ預ル神官國司等ニ祿ヲ賜フコト差アリ共ニ是毎年行フ所ノ新嘗ニ關スル禮典ナリ是ヨリ先キ大嘗新嘗ハ名ヲ異ニスレトモ實ハ同シトナリシカ此天皇ノ御世ニ方ツテ始メテ大嘗ト新嘗トノ

區別ヲ生シ一代ニ一度行フ所ノ者ヲ大嘗會トシ毎年十一月ニ行フ者ヲ新嘗トス扶桑略記ニ天武天皇白鳳元年二月卽位アリテ十一月大嘗會ヲ行ヒ十二月奉侍ノ官人並ニ播磨丹波二國ノ郡司ニ祿ヲ賜フトアリ又年中行事秘鈔ニ仁和書ヲ引テ國家大嘗會ハ天武天皇ノ御世ヨリ起ルト見エ皇年代略記ニモ亦全シ趣ニ見エタルニテ知ル可シ且此天皇ノ四年新嘗ノ爲ニ國郡ヲ卜定シ山田郡ヲ齋忌トシ訶沙郡ヲ次トストノ事ハ即チ後世ノ所謂悠紀主基ト曰ヘル者ニシテ其義ハ此齋忌及次トノコトナル可シ所謂悠紀主基ノ國悠紀主基ノ殿悠紀主基ノ幟悠紀主基ノ屏風ナト曰ヘル語ハ此ニ本ツケル者ナル可ク大嘗會ハ勿論新嘗祭ニモ關係アル語ナリ悠紀或ハ由幾ニ作り主基或ハ須岐ニ作ル



等種ヤノ字ヲ用井タレトモ別ニ意義アルニ非ス釋紀ノ私  
記ニ須支師說次於齋忌也トアレハ齋忌ハ神事ニ供スル稻  
ヲ出ス所ニシテ須支ハ之ヲ助クル者ナル可シ此悠紀主基  
ノコトニ付テハ種ヤノ沿革アリテ其コトハ歴史ニモ見え  
タレトモ其利弊ノ尤多ク關スル所ハ主トシテ大嘗會ノ時  
ニ在ルヲ以テ今之ヲ詳ニセス文武天皇大寶ノ令ヲ定メ給  
フニ當リ十一月下卯ヲ以テ祭日トシ若シ三卯日アレハ中  
卯日ヲ用井ルコトトナレリ此日幣ヲ按上ニ奠ル神三百四  
座并ニ大社一百九十八所前一百六座合計六百〇八座ノ神  
ヲ祭ル其祭式前一日祭儀ニ預ル人ヲト定ス當早且忌火ノ  
御湯ヲ供ス成一點天皇南殿ニ御ス近衛次將等日華門ニ向  
フ内侍劍璽等ヲ持テ左右ニ立ツ小忌ノ王卿庭ニ列リ掃部

官人筵道ヲ敷ク女官豫メ太刀契ノ櫃ヲ持テ殿ノ縁ニ置ク  
左右將監殿ニ上テ昇下ス主殿ノ官人御輿ノ帊ヲ取ル内侍  
御劔ヲ進ム乘輿御シ給フ内侍御璽ヲ進ム東堅御插鞋ヲ取  
リ御輿ヲ持ツ王卿前行女官扈從ス御藥ノ陪從以下例ニ依  
テ祇候ス月華門ヲ經テ陰明門ニ出テ中和門ニ入り給フ左  
右近衛各一人中門ヲ開ク大忌小忌ノ王卿各列立ス御輿ヲ  
神嘉殿ノ南階ニ倚ス宸儀興ヨリ下リ給ヒテ南廂ノ戸ヨリ  
入り玉フ小忌王卿以下着坐シ訖テ諸司殿ノ東南ノ屋ノ南  
間ニ神座ヲ設ク納言打拂篋ヲ執リ參議ト辨ト板枕ヲ昇ク  
自餘ノ人御帖短帖ヲ昇ク神祇ノ官人傳取テ之ヲ神座ニ供  
ヘ奉ル近衛門ヲ閉ツ内侍縫司ヲ率テ寢具ヲ神座ノ上ニ供  
フ亥一尅天皇神事ノ御服ヲ着給ヒ御座ニ就テ御手ツカラ

神饌ヲ供へ白黒酒ヲ供へ奉ルノ儀アリ其儀終テ神饌寢具  
ヲ撤シ奉ル訖テ御衣ヲ改メ給ヒ寅一刻大殿祭ノ後本官ニ  
還御シ給フ以上ハ政事要略江家次第等ノ書ニ見エタル御  
儀式ノ大略ナリ其詳ナルコトハ大嘗會ノ御儀式ト参照ス  
可キ者ナルヲ以テ一場ノ講話ノ能ク盡ス所ニ非ス且古禮  
ニハ此次ノ日即辰日ヲ以テ豊明節會ト曰ヘル大禮ヲ行ヒ  
天皇豊樂殿ニ御シテ群臣ヲ宴シ給フ此儀式ノ新嘗祭ト相  
率連セルヲ以テ古禮ノ書ニ新嘗祭ノコトヲ載スル者紙數  
尤多シ然レトモ今日ニ在テハ新嘗祭ハ卯日ニ限り豊明節  
會ハ行ヒ給ハサル故新嘗祭ノ儀式ノ概略ノミヲ述ヘテ今  
日現行ノ禮典ノ參考ニ供ス  
新嘗ノ御祭典ハ後世ニ至ルマテ大差ナカリシコトハ建武

年中行事ニ今夜新嘗ノ祭ナリ平手ノ數十二ナリ其外カハ  
ラスト曰ヘルニテ知ル可シ節會ノ儀式モ亦全シ然レトモ  
其後朝廷益衰フルニ及テハ新嘗モ節會モ二ツナカラ行ハ  
レサリシヲ櫻町天皇ノ元文五年十一月二十四日御再興ア  
リタリ然レトモ此ノ時神嘉殿ナキヲ以テ紫宸殿ニ於テ之  
ヲ行ヒ給ヒシ由野史ニ見エタリ享保年中行事ヲ見レハ中  
御門天皇ノ御世ニ此御祭典ヲ行ヒ給ヒ此後毎年行ハルル  
コトトナリ寛政三年ニ至リテ神嘉殿ヲ建テラレ此ニ行幸  
マシマシテ禮ヲ行ヒ給フ明治元年十一月十八日吉田家ニ  
於テ之ヲ行フ此時御東幸中ノ故ヲ以テナリ全二年十一月  
二十四日神祇官代吉田社ノ宗源殿ニ於テ之ヲ行フ此時東  
京ニ於テ御遙拜在セラル全三年十一月二十四日神祇官ノ

正廳ニ於テ之ヲ行フ全四年ニハ大嘗祭ヲ行ハレタルヲ以テ別ニ新嘗祭ヲ行ハス全五年十一月二十二日山里御庭ノ神嘉殿ニ於テ新嘗祭ヲ行フ全六年十一月二十三日赤坂假皇居内御假殿ニ於テ之ヲ行フ全七年十一月二十三日赤坂假皇居内ノ神嘉殿代ニ於テ之ヲ行フ爾後大差アルコトナシ全二十二年今ノ皇居へ御遷幸以來ハ賢所ノ西側ニ神嘉殿ヲ御造營ニナリ全所ニ於テ之ヲ行フ此ヨリ以來八年々恒例トナレリ

上ニ言ヘル如ク新嘗祭ニ牽連セル豊明節會ハ今日行ハセ給ハサレトモ新嘗祭ノ前日ニ鎮魂祭ヲ行フコトハ今日ニモ行ハセ給ヘリ此鎮魂祭ハ令ニモ曰ヘル如ク離游セル運魂ヲ招キテ身體ノ中府ニ鎮ムル爲メ天皇ノ御魂ヲ齋ヒ奉

ル所ノ者ナリ此御祭ハ神武天皇都ヲ橿原ニ定メ給フ時ヨリ始マル天皇宇麻志麻治命ニ詔シテ其父饒速日命ノ天ヨリ受來リシ瑞寶ヲ以テ鎮セヨト詔シ給ヘル故事ニ基ツケル者ナリ蓋自ヲ一種ノ御祭典ナレトモ之ヲ新嘗ノ前日ニ行フ者ハ猶祭日ニ先ツテ齋スルカ如キノ意ナル可シ其御儀式ハ新嘗ト共ニ官報ニ掲載セリ

抑我皇室ハ天神ノ遺裔ナルヲ以テ今日ニ至ルマテ天神ニ仕ヘ奉ルニ在スカ如キノ誠ヲ竭シ給フコト此ノ如シ加之民命ハ食ニ在ルヲ以テ天神以來深ク之ヲ重シ給ヒ祈年祭ヲ行フテ以テ豊熟ヲ祈リ新穀始メテ成ルニ及テハ直ニ之ヲ宗廟ニ薦ム是即新嘗祭アル所以ナリ十一月ニ至テハ新穀全ク熟スルヲ以テ遍ク之ヲ諸神ニ供シ以テ報賽ノ意ヲ

表セラル至尊ハ怡モ萬民ヲ代表シテ諸神ニ報賽ノ禮ヲ行  
ヒ給ヘル者ノ如シ然ラハ則人民タル者苟モ此義ヲ辨フル  
トキハ各箇各箇ニ報賽ノ意ナカル可カラス聞ク所ニ據レ  
ハ近年マテ西京ノ人家ハ大嘗新嘗ノ二祭アル毎ニ官吏ハ  
人民ヲ警戒シ人民ハ互ニ相警戒シ靜肅ニ夜ヲ守リ又火ヲ  
舉ケサルコト支那ノ寒食ノ如シ之ヲ稱シテ煙止ト云フ此  
ノ如クナラハ人民各箇各箇ニモ報賽ノ意ヲ忘レサル者ト  
謂フ可キ者ナラン今ハ固ヨリ此ノ如キコトモ廢レタル由  
ナリ西京スラ且然リ西京以外ノ人民ハ此ノ如キコトサハ  
モナケレハ固ヨリ此ノ禮典ノ重キ所以ヲモ知ラサル可シ  
豈ニ慨歎ス可キコトナラスヤ

贈太政大臣岩倉具視曾テ地方官參集ノ席ニ於テ演說セ

シユトアリ其大意謂ヘラク大嘗ニハ悠紀主基ノ國郡ヲ  
卜定シテ其國郡ヨリ神供ノ新穀ヲ貢セシムルヲ例トセ  
リ新嘗祭ニハ中古以來貢納ノ國郡ヲ卜定セスシテ之ヲ  
行ヘリ明治以前ハ御料ト稱スル山城國宇治郡ヨリ之ヲ  
貢セシカ同五年以來ハ大藏省ヨリ之ヲ納メ同十一年ヨ  
リハ東京府ヨリ之ヲ納メ全十四年ヨリハ植物御苑ノ收  
穫ヲ用井給フ因テ思フニ大嘗會及毎歲新嘗祭ニ當リ各  
地方ノ農家ヨリ神饌ニ供スル新米ヲ貢納スルコトヲ得  
セシメ貢納ノ人ハ地方官ノ適宜ヲ以テ之ヲ定メ毎歲交  
代セシメ其獻米ヲ神饌ニ供シ祭祀畢ルトキハ供神ノ酢  
ヲ以テ前ノ米ヲ獻スル者ニ頒チ賜フトキハ國民ノ農ヲ  
重シ粟ヲ貴フノ風ヲ振興シ且忠孝敬愛ノ情ヲモ啓導ス

ルニ足ラシク云々是明治十五年十二月ノ事ナリキ爾後數年ヲ經テ其事行ハレサリシカ本年ニ至リ地方知事ヨリ獻米ノ事ヲ宮内省ニ願出テタルニ宮内大臣之ヲ許可セリ具視ノ説始メテ行ハレタレントモ是ヨリ先キ具視既ニ薨セルヲ以テ之ヲ視ルニ及ハス因テ之ヲ附記シテ以テ廣ク其事ヲ傳フト云フ

祝祭日講話終

附錄

皇后宮御誕辰講話

皇后宮御誕辰ニ付テハ他ノ祝日祭日ノ如ク許多ノ説明ヲ要スルコトナケレ共其起原及沿革ニ付テ一言セントス陛下ハ從一位一條忠香公ノ第三女ニマシマシテ嘉永三年四月十七日ニ御降誕在セラル太陽曆ヲ以テ推歩スルトキハ紀元二千五百十年五月二十八日ニ値レル故ニ今ニモ毎年五月二十八日ヲ御誕辰ト定メラル明治元年十二月二十八日御入内ノ儀ヲ行ハセラル全日皇后宣下アリタル由ニ拜承セリ然レトモ其以來御誕辰ニ付テノ御儀式ハ行ハサセラレサリシコトト見エタルカ明治七年五月二十八日皇后宮御誕辰ニ付宮内省中勅奏任官御輿ニ於テ皇后宮へ拜謁

仰付ラレ全日十一時省中判任官參賀申上午後四時親王大  
臣參議召出サレ御學問所ニ於テ聖上皇后官御陪食仰付ラ  
レタリ全八年五月二十八日皇后官御誕辰ニ付十時參賀奏  
任官以上御輿ニ於テ皇后官へ拜謁被仰付官内省一統ニ祝  
酒ヲ賜ヒ十二時官内大臣參議各國公使召出サレ御學問所  
ニ於テ御會食仰付ラレタリ同九年五月二十八日皇后官御  
誕辰ニ付省中勅奏任官へ拜謁仰付ラレ引續キ華族勤番ノ  
輩へモ拜謁仰付ラル又官内省中一統ニ祝酒ヲ賜フコト前  
年ニ同シ同十年祝酒ヲ賜フコト又前年ノ例ニ同シ同十一  
年皇后官御誕辰ニ付午前十時禮服用參賀アルヘキ旨達  
セラル祝酒ヲ賜フコト前年ニ同シ全十二年以來ノ御儀式  
ハ大同小異ナリ同二十年五月二十四日官内省ノ達ヲ以テ

省中ノ官員ノミナラス皇宮御造營事務局學習院華族女學  
校博物館ノ官員モ亦參賀ノ上酒饌ヲ賜フコトナリ又別  
段ノ御達ハナケレ共參賀ニ與ル人ノ夫人モ亦拜謁ヲ許サ  
ルルコトナレリ此ノ如ク漸ヲ以テ御儀式完備シテ今日  
ノ例トナレリ此御誕辰ハ固リ一般ノ祝日ニハ非サルモ本  
校ハ女子高等師範學校ナルヲ以テ夙ニ此御誕辰ニ當リ奉  
祝ノ意ヲ表センカ爲天長節ニ全キ儀式ヲ行ヒ校長ハ特ニ  
參内シテ拜賀ノ禮ヲ行ヒ來レリ加之陛下ハ嘗テ女子教育  
ニ御心ヲ用井給ヒ本校建設ノ際鉅額ノ金圓ヲ下シ置カレ  
爾後數行啓ヲ仰出サレ優渥ノ恩旨ヲ賜ヒタルコト諸氏ノ  
熟知スル所ノ如クナレハ此御誕辰ニ當リ臣輩一同豈ニ欣  
躍シテ祝意ヲ表シ奉ラサル可ケンヤ

此の祝祭日講話は女子高等師範  
學校長細川三位君の之れを以て由は  
其緒言に詳され、今更に贅せし然るも  
今度此書をせよ公よを以て罷むる已れ  
其校正をも云ふれ、式部職に奉務の  
方お能はるる、固より其任に當らざるを  
知まじ、君の如く深く之を用ひらるる誠

つゝも否むしとあましむしあはし  
讀む校しむふは須くする類ひの書との  
何れ終と世よせしむるのあはしむるは古今の  
史典と證をとりて斯く真しむるは  
其端をわしむるはあましむるは國  
家よりて儀式禮典の最もすまはしむるは  
云ふはあましむるは今の時とあはしむるは

其を説明せる書のなごむしは人々  
何れよりしむる其儀の尊しむるを知らぬ  
然るはこれ書に小冊とあはしむるはあま  
しむるは國家の寶典とあはしむるは今其校  
正と畢りしむるはあはしむる書の出来たる  
あはしむるはあましむるはあはしむるはあ  
ましむるはあましむるはあましむるはあ  
ましむるはあましむるはあましむるはあ



古今事類考  
斯くも其

明治二十五年十一月三日 掌典宮地嚴夫

岡田起作書

明治二十五年十二月廿五日印刷

明治二十五年十二月廿六日出版

明治二十六年三月廿五日印刷

定價金拾八錢

著者 東京神田區駿河臺北甲賀町一番地  
發行所 細川潤次郎

印刷者 東京京橋區築地二丁目十七番地  
曲田成

印刷所 東京京橋區築地二丁目十七番地  
東京築地活版製造所

發賣所 東京京橋區築地二丁目六番地  
求林堂西川忠亮

